昭和45・46年度加曽利貝塚東傾斜面
遺跡限界確認調査概報

後藤和民　庄司　克
後藤美智子

はじめに

この調査は、昭和45年度から46年度にかけて継続して実施され、その目的や対象が一連の関連をもっている。これを年度ごとに別々に報告するとかえって調査結果の内容や意義が不明確になる恐れがあるので、ここに一括して要約してみた。

I　緊急調査の動機

1. 加曽利貝塚保存の経過

加曽利貝塚については、昭和37～38年の全国的な保存運動によって、昭和39年に北貝塚を含む約55,000㎡を都市公園として千葉市が単独で買収した。そして南貝塚については、昭和39～40年度にかけて、千葉市が日本考古学協会に委託して、緊急発掘調査を実施。その結果、北貝塚と密接な関係を有し、南北併せて保存しなければ、加曽利貝塚保存の意義がないことが明らかにされた。そこで再び全国的な保存運動が展開され、日本考古学協会の総会決議によって、緊急調査は中断されるに至ったのである。

その後千葉市は、南貝塚の保存に着手したが、その土地所有者・東洋プレハブ工業K・Kとの折衝の結果、南貝塚の貝層部ぎりぎりの範囲である約26,400㎡だけを確保したにすぎない。これも、昭和42年度から45年度にかけて、国庫補助と県費補助を受けながら分割買収したもので、千葉市はこれをもって加曽利貝塚の買収は完了したものとみなした。

2. 加曽利貝塚の範囲について

ところで、加曽利貝塚の範囲については、かつて明確に把握されたことがなかった。ただ、南貝塚の貝層部の東側にある古山支谷は、当時の水路（交通路）として重要な意義をもち、舟着場や湧水点などが存在する可能性もあり、集落の玄関口としても貴重な生活圏内に含まれることは、誰もが予想していた。したがって、この支谷と貝層部との間の傾斜面は、当然、集落の範囲内に含まれることは十分に予測されていたはずである。

ところが、考古学者の中には、大型貝塚を単なる巨大な「ごみ捨て場」として捉え、集落はその「馬蹄形貝塚」の内側に馬蹄形に展開していたとする近視眼的観点をもつものが多い。したがって生活基盤の広がりよりも「ゴミ捨て場」としての規模や形態の特異性を強調するあまり、その遺跡の範囲を貝層部以内に限定するといった狭隘な把握により、その周辺部は、ただ単に当時の集落景観や自然環境としてのみ、付随的に保存されることが望ましいといった、消極的な見解を示すものが多かったのである。

3. 老人ホームの建設計画

考古学界においてさえ、このような認識であったので、千葉市は、貝層部ぎりぎりの範囲の買収によって、南貝塚の保存事業は完了したものと判断したのである。しかし、その平坦部のみを買収され、その東側の傾斜面を残された土地所有者は、土地利用の不便さから千葉市に対し、再三その買収を要請していた。時あたかも、京葉道路延長に伴う老人ホーム（都園）の移転問題が起り、この際、大型施設の建設を計画した千葉市は、その用地として加曽利南貝塚の東側に隣接する平坦部および傾斜面約36,000㎡を、昭和44年度までに千葉市開発財団によって先行取得した。

以来、大蔵省より巨額の補助金を受け、着々と計画を進めていた担当課は、昭和45年度より着工の運びとなり、その東傾斜面の削平工事にかかろうとした。そこで、千葉市教育委員会では、文化財保護審議委員会の答申に基づき、この東傾斜面も集落の範囲である可能性があるとし、建設用地の変更を求めたが、その確証がないとして強行する動きが強かった。止むなく、当初の建設予定の地点において、遺跡の限界を確認するため、現地の加曽利貝塚博物館を中心として、その発掘調査を実施することになったのである。

Ⅱ　調査の経過

1.　調査の体制

○　調査主体　　千葉市教育委員会

○　調査担当者　　加曽利貝塚調査団　団長　滝口宏（早稲田大学教授）

○　調　査　員　　o千葉市加曽利貝塚博物館学芸員・後藤和民、同事務員・薬師寺崇、庄司克、市川勇（以上学芸員有資格）　o明治大学考古学専攻生・郷田良一、飯塚博和ほか
o立正大学考古学専攻生・上坂悟
o明治大学考古学研究会・上川哲哉、西村正、石塚一良ほか

2.　調査の期間

○　第1次　　昭和45年8月 1日　　開始
　　昭和45年9月30日　　終了

○　第2次　　昭和46年2月 1日　　開始
　　昭和46年3月31日　　終了

○　第3次　　昭和46年6月 1日　　開始
　　昭和47年3月31日　　終了

3.　調査の目的

最終的には、老人ホームの建設を許容するか、停止するかの判断の根拠を求めることが当面の目的であるが、しかしその根拠となるのは学術的な意義である。したがって、この調査を実施するに当っては、あくまでも加曽利貝塚の実質的な性格や内容を把握し、それを原始集落遺跡として完全な形で保存および整備・活用するための基礎的な調査として、遺跡の範囲を確認することにある。その具体的な調査のおもな対象として、少くとも次のような課題を挙げることができる。

(1)　貝塚と傾斜面と支谷との関係を、当時の生活舞台としての地形的意義や集落立地の自然条件として把握する。

(2)　集落内における住居址、貯蔵穴、製作址、祭祀場、舟着場などの遺跡の分布を確認し、遺跡の範囲を把握する。

(3)　それらの遺構と貝塚との関係を把握する。

(4)　加曽利貝塚を集落遺跡として活用するために、その必要条件として集落の立地条件、および集落範囲を確認し、それを買収保存するための学術的根拠を確保する。

4.　調査対象区域

第1次発掘調査　加曽利南貝塚東南平坦部
　　約1,000m^2

第2次発掘調査　加曽利南貝塚東傾斜面
　　約8,000m^2

第3次発掘調査　加曽利南貝塚東南側平坦部
　　約10,000m^2

5.　調査の方法

(1)　地形測量

南貝塚を含む周辺地域の台地部分約72,600 m^2を、東西・南北を軸とする20m×20mの方眼に区画した経緯トラバースによって測量した。なお、将来の全面的把握や遺構を図面上に定着するため、その測量原点を現地に固定した。

(2)　調査区の設計

測量用トラバース（20m×20m方眼）にもとづき、台地全域を20m×20mの方眼に区切り、これを1区とし、その1区をそれぞれ4m×4mのグリッド（25G）に分割した。そして、対象区域については、20m間隔に、東西方向にグリッドを交互に連結した市松状のトレンチを設定した。

(3)　グリッド調査

平面的把握　住居址や貯蔵穴などの集落遺構の分布を平面的に把握する。この市松状のトレンチを12mおきに巾8mづつ設置すると、対象区域の5分の1の面積を試掘することによって、約5分の3の面積について概観することができる。なお、このトレンチにおいて遺構が発見された場合は、その必要範囲を拡張して、遺構の全体を把握する。

断面的把握　グリッドを市松状に連結することによって、対象区域の地形的推移を東西・南北の断面によって、層位的に捉える。また、文化層や遺構などの堆積状態や新旧関係などを層位的に把握する。

6.　「遺跡限界確認調査」について

この調査をあえて「遺跡限界確認調査」と銘打ったのは、当時一般に、1つ1つの遺跡について、その範囲を確認しようとする観点が欠落していたのと同時に、従来の貝塚としての加曽利貝塚の捉え方に対して、あくまでも集落としての加曽利遺跡を捉えようとする観点に基づいている。したがって、旧来「加曽利貝塚」として認識されていた範囲が、必ずしも「加曽利遺跡」の限界であると

はかぎらないということを前提として、むしろ原点に立ちもどり、改めて集落遺跡としての範囲を確認しようとするものである。これは、最近においては当然のこととなっているが、当時においては全国でも初めての試みであり、きわめて重要な意義をもっていたのである。

7. 発掘調査区の設定

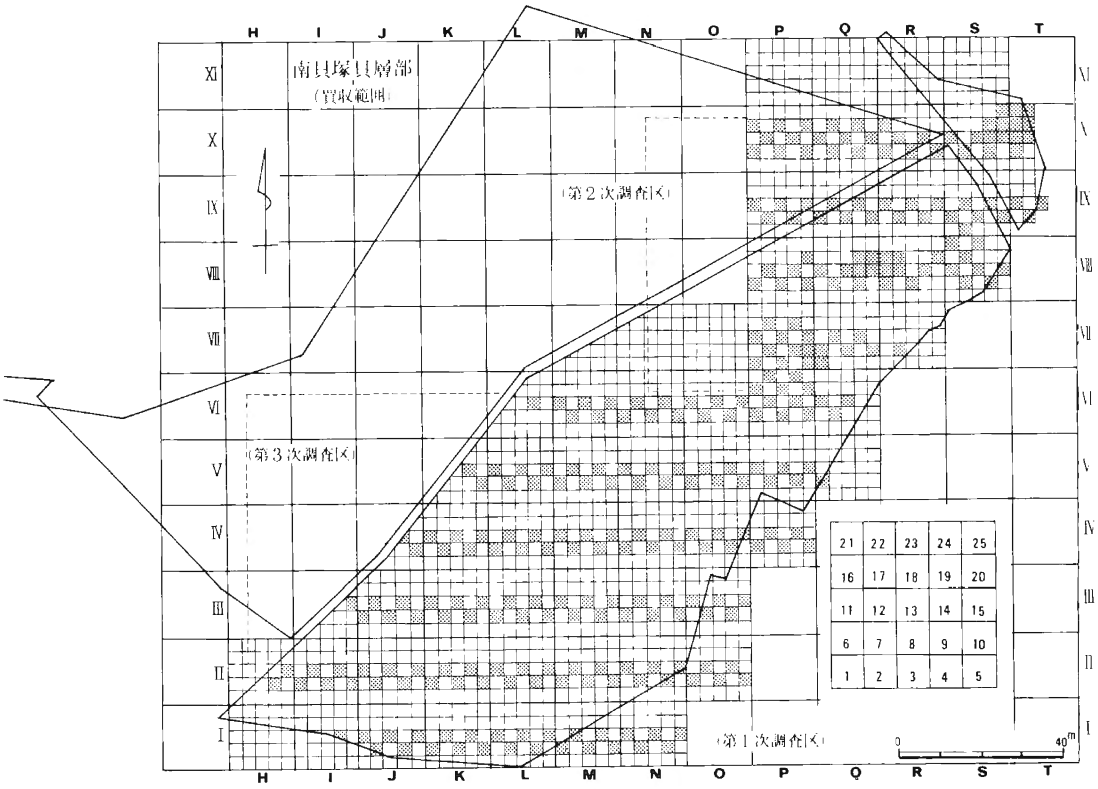
第1次発掘調査に先立ち、現地形の測量記録をおこない、その地形図に基づき、調査対象区域内の発掘調査区およびグリッドの設定を行った。

まず、昭和39年度に加曽利貝塚調査団によって行った南貝塚発掘調査の際のVトレンチに平行して、南北基本線（Y軸）を定め、次にこれに直交する東西基本線（X軸）を設定し、それぞれの4隅に基点を設置した。これら東西・南北の基本線を中心に遺跡全域を方眼桝形に区画し、そのうちに発掘調査区を設定した。発掘調査区は1辺20mの方眼桝形で、さらに、その中を4mごとに縦・横に区切って、1辺4mのグリッドを設定した。したがって、1発掘調査区内は25グリッドづつとなる。その名称は第1図に示したとおりである。

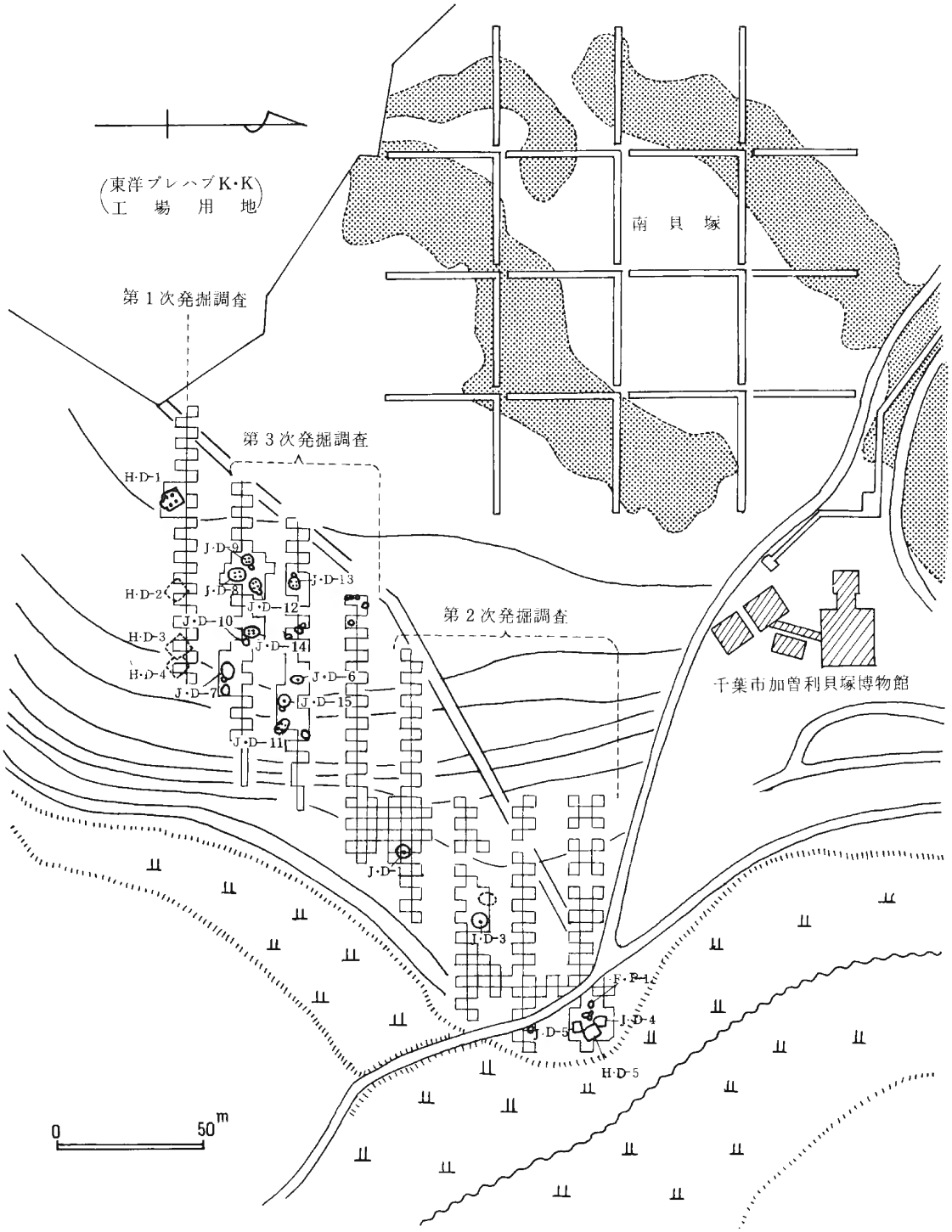
第1次調査の対象区域は、J－IV区からO－IV区、I－III区からO－III区、H－II区からO－II区、H－I区からN－I区である。

第2次調査の対象区域は、P－XI区からS－XI区、P－X区からT－X区、P－IX区からT－IX区、P－VII区からS－VII区、P－VII区からR－VII区、P－VI区からQ－VI区、P－V区からQ－V区である。

第3次調査の対象区域は、J－IV区からO－IV区、K－V区からQ－V区、L－VI区からQ－VI区である。



第1図　加曽利南貝塚南側平担部および東側傾斜面における調査区の設定図



第２図　加曽利南貝塚の南側平坦部および東側傾斜面における第１次～第３次発掘調査
—トレンチおよび発見遺構概念図—

市松状の区画は、グリッドを連続させたトレンチ。H・D—№ は古墳時代住居址、J・D—№は縄文時代住居址。P—№ は縄文時代の小竪穴（貝層中の溝は、昭和39年～40年における緊急発掘調査のトレンチ）

6. 位置と立地

各調査対象区域の遺跡全域における位置と、その立地条件について、ごく簡単に触れておく。

(1) 第1次発掘調査（加曽利南貝塚南側平坦部）

もともと、加曽利貝塚を載せている台地は、西側から続く広大な平坦部のぎりぎりの位置に、南北両貝塚の貝層部を残して、それから東側は古山支谷に向って、北貝塚からは急峻に、南貝塚からは緩慢に傾斜している。その東側傾斜面の中央には、台地が古山支谷に向って突出して岬状を呈している部分があり、その南側には、古山支谷から西に向って遡上する小支谷がある。それは、東洋ブレハブの工業敷地の南端をめぐり、市営霊園と桜木小学校との間から北に向って湾曲し、桜木ゴルフ練習場の東側にまで達している。

この第1次発掘調査の対象となった区域は、小支谷に面する台地縁辺部で東洋ブレハブの工業敷地の北側に隣接し、加曽利南貝塚の貝層部とは60～100mをへだてるにすぎない。この区域の中央には、東洋ブレハブから岬状の台地先端部に通づる旧道があり、それより以東の小支谷までの区域の平坦部が老人ホームの建設予定の候補地に挙げられたので、まずこの地区が調査の対象となったわけである。標高30～32m、小支谷の水田面との比高は約4m、南貝塚の貝層部との比高は2～3mをはかるにすぎない。

(2) 第2次発掘調査（加曽利南貝塚東側傾斜面）

この調査の対象となった区域は、第1次発掘調査時の調査区の北東部に隣接し、岬状に突出した台地先端部にかけての緩傾斜面で、標高24～18mをはかる。この区域も、南貝塚の貝層末端部より最短距離で約60mをへだてるにすぎない。当時、貝類の繁殖する海岸から採集した貝類を運び上げたとき、この岬状の緩傾斜をなす突出部こそ、舟着場や荷揚げ場となり、集落の玄関口となった可能性がある。したがって、集落全体におけるこの地区の意義づけこそ重要な課題となるであろう。

(3) 第3次発掘調査（加曽利南貝塚南側平坦部）

第1次発掘調査の結果、その調査区内から古墳時代の集落が発見され、それを保存するため、老人ホームの建設予定地を東傾斜面に変更して、第2次発掘調査が行われた。その結果、縄文早期から後期に至る各時期の住居址が発見され、貝塚とも密接な関連があるので、建設予定地をさらに変更する必要が生じた。ところが、第1次発掘調査で発見された古墳時代の集落は、加曽利貝塚とは直接関係がないとし、再度同じ南貝塚の南側平坦部に建設予定地が移され、記録保存のための緊急発掘調査が実施されることになった。すなわち、この地区は、第1次発掘調査区の北側に隣接し、南貝塚にますます接近し、標高は30～32m、ほぼ平坦面をなしている。

第3図　加曽利南貝塚の南側平坦部および東側傾斜面における第1次～第3次発掘調査（東側古山支谷より）

Ⅲ　おもな発見遺構

1.　古墳時代の住居址

第1次発掘調査により、南貝塚の南側平坦部より古墳時代後期（鬼高～真間式期）の竪穴住居址が4基確認された。これらは、Ⅰ－Ⅲ区からN－Ⅲ区にかけて設置された市松状のトレンチ内から発見されたもので、表土攪乱層を剝いだ段階で、方形プランの掘り込みが確認され、いずれもその覆土の表面から鬼高式から真間式にかけての土器片が発見されている。これによって、この周辺には古墳時代後期の集落が展開していることが予測されたのである。

ここでは、4基の住居址のうち完掘された第1号住居址（H・D－№1）について、その概要を述べておきたい。

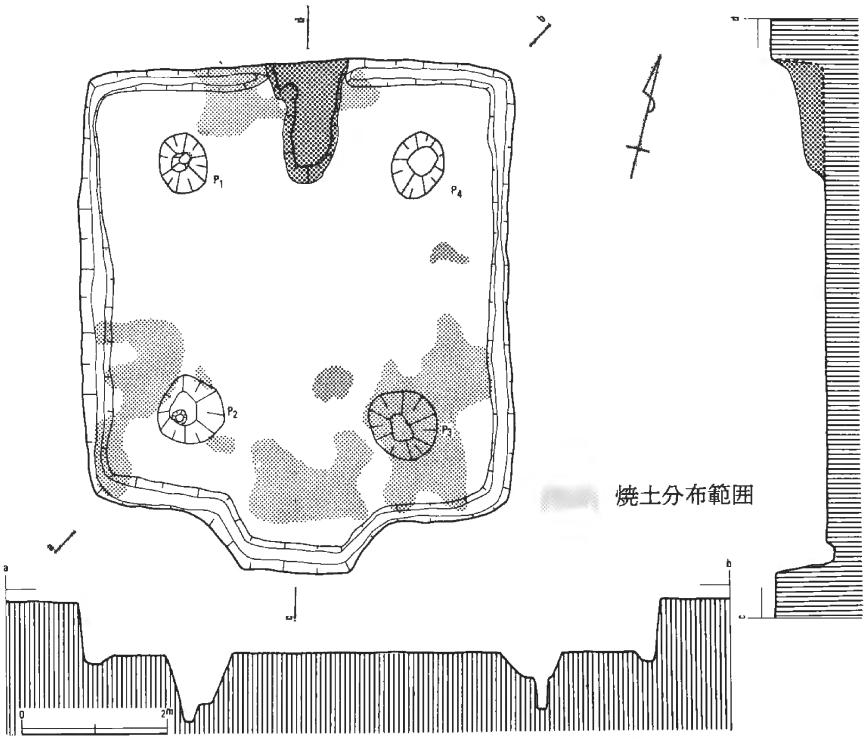
H・D－№1住居址（第4・5図参照）

この住居址の平面プランは、南端に台形の張り出しを有する長方形で、長軸はほぼ北を指している。住居址の規模は、壁の上面で南北約6.5 m、東西5.8 mで、張り出し部を含むと南北の長軸は7.2 mをはかる。壁高は、住居址南端で約0.5 m、北端で0.9 mで、第2層の焼土層上面からほぼ垂直に掘り込まれている。竈は北壁の中央部にあり、多少の土器片が突き刺さっていた。柱穴は4本で等間隔の位置にあり、形状、規模もほぼ同じである。周溝は、北壁中央の竈付近で一部切れているほか全面に巡り、周溝内にピットはなかった。

この住居址は、基盤のハードロームをかなり深く掘り込んでおり、床面は堅く踏み固められていた。床面直上には、焼土が厚くブロック状に堆積していたが、炭化物は発見されず、わずかに黒色有機質土の堆積がみられた。床面上における遺物の発見は少なく、竈周辺および南端の張り出し部から若干の土器の出土をみたのみであった。すなわち、刀子1本、土玉1ケ、坏形の須恵器1ケが完形で、そのほか支脚1ケと土師器1ケ体分が破片で出土した。これらの遺物によって、この住居址が真間式期に属することが判明した。

なお、これらの住居址の発見によって、この地域が古墳時代の集落遺跡であり、加曽利貝塚とは直接関係がないとしても、縄文時代と古墳時代という隔絶した時代に、同じ台地が集落立地として選ばれたことに重要な意義がある。そこで、千葉市文化財保護審議会の答申によって、老人ホームの建設予定地の変更が求められるに至った。

第4図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見のH・D－1住居址



第５図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見されたＨ・Ｄ－１住居址古墳時代後期（真間式期）

第６図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見されたＨ・Ｄ－２～Ｈ・Ｄ－４住居址
表土をはいだ段階で、住居址の落ち込みが確認されたので、未発掘のまま埋めもどされた。

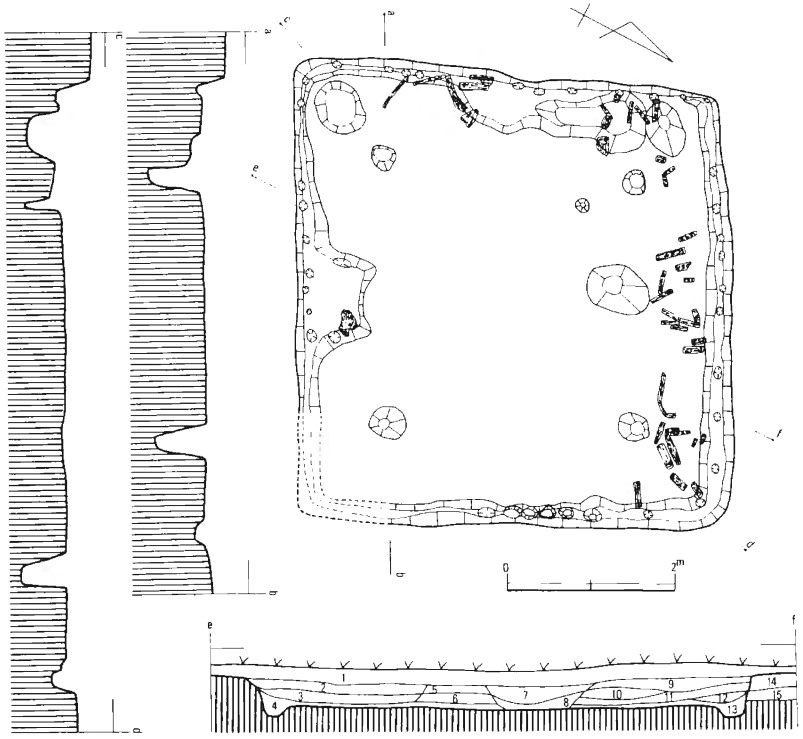
H・D－No.5住居址（第7図参照）

第2次発掘調査において、南貝塚の東側傾斜面の岬状に突出した台地の先端部から、古墳時代の住居址が2基（H・D－No.5およびH・D－No.6）発見され、ともに鬼高期に属するものであった。このうちNo.6住居址は、台地から水田に降りる農道や旧道の分岐点にあり、その表面の硬化や削平のため、住居址のプランなどはほとんど消失し、そのごく一端が残っているだけであった。ただ、No.5住居址だけは、岬状の突端部にあったためか、その大半の状態が遺存していたので、ここでは、この住居址について概観するに止める。

この住居址の平面プランは、北壁が5.2 mを測るのに対して南壁は5.5 mをはかり、ほぼ台形を呈する。長軸は北北東を指している。床面は、南端部でロームを約40cmほど堀り込んでおり、かたく踏みかためられている。壁にそって四周に巾がせまくごく浅い周溝が掘りめぐらされており、その中に小さな壁柱穴が断続的に穿たれている。また4隅には、直径20cm前後、深さ50～60cmのやや細めの柱穴が掘られている。その床面には、全面に焼土、灰および炭化物が散在し、5～10cmのかなり厚い層をなしていたが、床面上には炉址も竈跡も発見されなかった。

なお、南西隅に直径約70cm、深さ約30cmの円形を呈するピットがあり、その周辺から甕形、壺形、坏形などの土器と鉄製の鏃先などが集中して出土しており、これが貯蔵穴であったことを物語っている。

ところで、このNo.5住居址およびNo.6住居址が、古山支谷に突出する岬状の狭隘な台地先端部に占地していることは、きわめて興味深いことであり、No.1～No.4住居址が台地上の平坦部に展開していることと対照しても、当時の集落立地と支谷との関係やその時期的変遷を考える上でも、きわめて重要な課題を秘めている。とくに、この集落の近辺には、当時の古墳または古墳群がかつて存在していた形跡がない。ただ、同時期の集落としては、古山支谷をへだてた若松町・滑橋台南遺跡と小倉町・木戸作遺跡があるだけで、あとは約3km下流の都川との合流地点の加曽利町に、若郷古墳群、大泉古墳群、台畑古墳群などの古墳と、姫宮遺跡、高畑遺跡、大泉谷遺跡および台畑遺跡などの集落が存在している。これらの遺跡群とこの集落とは直接の関係はないとしても、当時の土地支配を考える上では重要な存在である。



土層説明

1　表土攪乱層
2　黒褐色土層
3　暗褐色土層(a)
4　褐色土層
5　暗褐色土層(b)
6　褐色土層
7　暗褐色土層(c)
8　暗褐色土層(d)
9　暗褐色土層(e)
10　黒褐色土層
11　暗褐色土層(f)
12　黒褐色土層
13　暗褐色土層(g)
14　暗褐色土層(h)
15　黒褐色土層

第7図　加曽利南貝塚東側傾斜面より発見されたH・D－5住居址　古墳時代後期（鬼高式期）

第１表　加曽利南貝塚の南側平坦部および東側傾斜面発見の古墳時代住居址

No.	形　態	規　模 長径×短径(m)	柱穴 (ロ)	周溝	炉址 (cm)	所属時期（型式）	伴出遺物・遺構	調査 年次
H・D—1	方　形	7.0　×　5.9	4	3辺	カマド	古墳後期（真間式）	甕・坏・支脚・刀子	第１次
H・D—2	方　形	（約６×６）	未明	未明	未　明	未　　明	落込確認・未発掘	第１次
H・D—3	方　形	（約５×５）	未明	未明	未　明	未　　明	落込確認・未発掘	第１次
H・D—4	方　形	（約５×５）	未明	未明	未　明	未　　明	落込確認・未発掘	第１次
H・D—5	方　形	5.5　×　5.2	4	全周	な　し	古墳後期（鬼高式）	甕・壺・坏・鍬先	第２次
H・D—6	方　形	不　　明	不明	不明	不　明	古墳後期（鬼高式）	土師器片・　削平	第２次

第８図　加曽利南貝塚東側傾斜面より発見されたH・D—5住居址の発掘状況

床面の全面に炭化物や焼土が充満していた。火災にあったのであろう。南西隅の貯蔵穴付辺に遺物が集中していた。

第９図　加曽利南貝塚東側傾斜面におけるグリッドの設定（北側、博物館の屋根から）

第２表　加曽利南貝塚の南側平坦部および東側傾斜面発見の縄文時代住居址・炉穴

遺構No.	形　態	規　模 長×短径（m）	柱穴 （口）	周溝	炉址 （cm）	所属時期（型式）	伴物遺物・遺構	調査時
F・P－1	小判型	2.8 × 1.5	なし	なし		縄文早期（茅　山）	底全面に焼土	第２次
F・P－2	小判型	2.0 × 1.2	なし	なし		縄文早期（茅　山）	底全面に焼土	第２次
F・P－3	小判型	1.7 × 1.2	なし	なし		縄文早期（茅　山）	底全面に焼土	第２次
F・P－4	小判型	1.6 × 1.0	なし	なし		縄文早期（茅　山）	底全面に焼土	第２次
F・P－5	小判型	2.4 × 1.2	なし	なし		縄文早期（茅　山）	底全面に焼土	第２次
J・D－1	楕円形	4.4 × 4.0	5	柱７	96 × 70	縄文後期（安行Ⅰ）	覆土中土器３	第２次
J・D－3	楕円形	5.0 × 4.6	不明	柱列	110 × 94	縄文後期（加ＢⅠ）	双口異形土器	第２次
J・D－4	方形？	5.0 × 3.5	不明	不明	不明	縄文前期（関　山）	J・D４と重複	第２次
J・D－5	長方形	5.5 × 5.0	8？	なし	86 × 65	縄文前期（黒　浜）	J・D３と重複	第２次
J・D－6	楕円形	5.2 × 4.2	1	柱６	なし	縄文中期（阿玉台）	打製石斧、石鏃	第３次
J・D－7	円　形	5.9 × 5.3	6？	全周	124 ×104	縄文中期（加　E）	貯蔵穴・貝層あり	第３次
J・D－8	円　形	5.6 × 5.1	2	全周	127 ×107	縄文中期（加　E）	炉縁土器、拡張	第３次
J・D－9	不整円	4.5 × 4.5	4～5	なし	108 × 89	縄文中期（加　E）	貯　蔵　穴	第３次
J・D－10	円　形	4.5 × 4.0	4	なし	83 × 81	縄文中期（加EⅡ）	土錘、磨製石斧	第３次
J・D－11	円　形	7.2 × 6.8	7	全周	174 ×126	縄文中期（加EⅡ）	磨製・打製石斧、浮子、磨石、石鏃	第３次
J・D－12	不整円	5.5 × 4.8	4	全周	108 × 80	縄文中期（加EⅡ）	磨製石斧、磨石、石鏃、土錘、浮子	第３次
J・D－13	不整円	5.5 × 4.8	5	なし	70 × 56	縄文中期（加EⅡ）	土錘、尖頭器、浮子、小型土器	第３次
J・D－14	不整円	5.0 × 4.0	6	なし	107 ×100	縄文中期（加EⅡ）		第３次
J・D－15	楕円形	4.0 × 3.5	1	なし	なし	縄文中期（阿玉台）	貯　蔵　穴	第３次

2. 縄文時代の住居址（第2表、第11図～第18図参照）

第2次発掘調査において、縄文早期の炉穴5基、前期の住居址2基および後期の住居址2基が発見され、第3次発掘調査において、縄文中期の住居址10基と11基に及ぶ小竪穴を確認した。これらを逐一詳述するいとまがないので、その概要を第1表および第2表にまとめ、そのうちのおもな遺構を例示しながら、各時期の集落展開の様相について概観を試みる。

(1) 縄文早期の炉穴

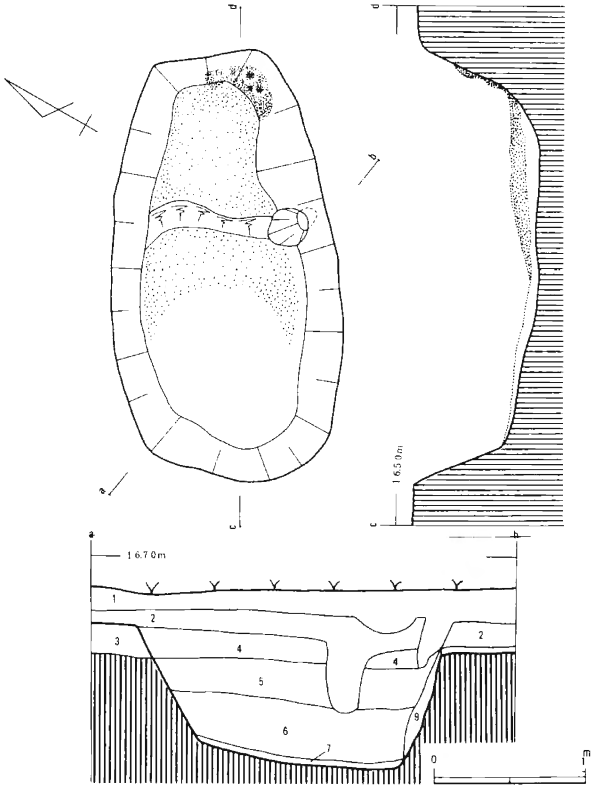
岬状に突出した台地先端部から5基の炉穴が発見され、そのうち4基は3基までが相互に切り合うほど集中し、他の1基だけがやや離れている。このほかにも、古道や農道のために削平されて消滅した遺構がいくつか存在した可能性もあるが、いまでは確かめようもない。これらのうち、比較的保存の良い第1号炉穴に触れておく。

F・P－No.1炉穴（第1号炉穴、第7図）

この炉穴は、長径2.8 m、短径1.5 mの長円形を呈し、主軸はほぼ北東を指し、床面は舟底形をなすが、その底面は南から北に向ってやや傾斜し、その北半部に焼土が15cmあまりも堆積していた。そのため、中央部で北半部と南半部とに段差がついているようになって、ベースの低い北半部の方がむしろ高くなっている感じであった。また、この焼土内から土器片が出土し、それによってこの炉穴が茅山式期に属することが判明した。

なお、このほかの4基の炉穴も、その出土土器によってすべて茅山式期に属することが判明しているが、第2号、第3号および第4号炉穴は相互に重複しているので、同時存在とは考えられず、その切り合いの様相からみて、第4号→第3号→第2号の順に重複していったものとみられる。この第1号炉穴と第2号～第5号炉穴との共伴関係は、それぞれの伴出遺物である茅山式土器をいかに詳細に分析し、型式的な新旧関係や同時期性を確認しても、その同時存在が証明されないかぎり明確には把握できない。

しかし、いずれにしても、この加曽利貝塚の全域において、これまでに、貝層部やその周辺の平坦部では、決してみることのなかった縄文早期の炉穴が、岬状の台地先端部においてのみ、集中的に発見されたことは、きわめて重要な事実である。とくに、従来の認識では、千葉市周辺においては、縄文早期から前期にかけての遺跡は、現東京湾の沿岸線に近いところにのみ分布し、内陸台地部においては、中期以降の遺跡こそ発展的に分布するが、早～前期の遺跡はほとんどないと考えられていた。ところが、この茅山式の炉穴をはじめ、縄文中～後期の大型貝塚が発達する内陸台地上から、縄文前期の住居址さえ発見されるに至ったのである。これは、貝層や貝塚こそ伴わないが、中期以降の大型貝塚を残すほどの集落が発展する同じ台地上に立地する以上、その集落の生成や、発展とあながち無関係ではないことを物語っている。



土　層　説　明

1.	表土攪乱層	5.	黒褐色土層
2.	褐色土層	6.	黒褐色土層
3.	暗褐色土層	7.	焼土混入褐色土層
4.	暗褐色土層	9.	褐色土層

第10図　加曽利南貝塚東傾斜面より発見されたF・P－1炉穴　縄文早期（茅山式期）

(2) 縄文前期の住居址

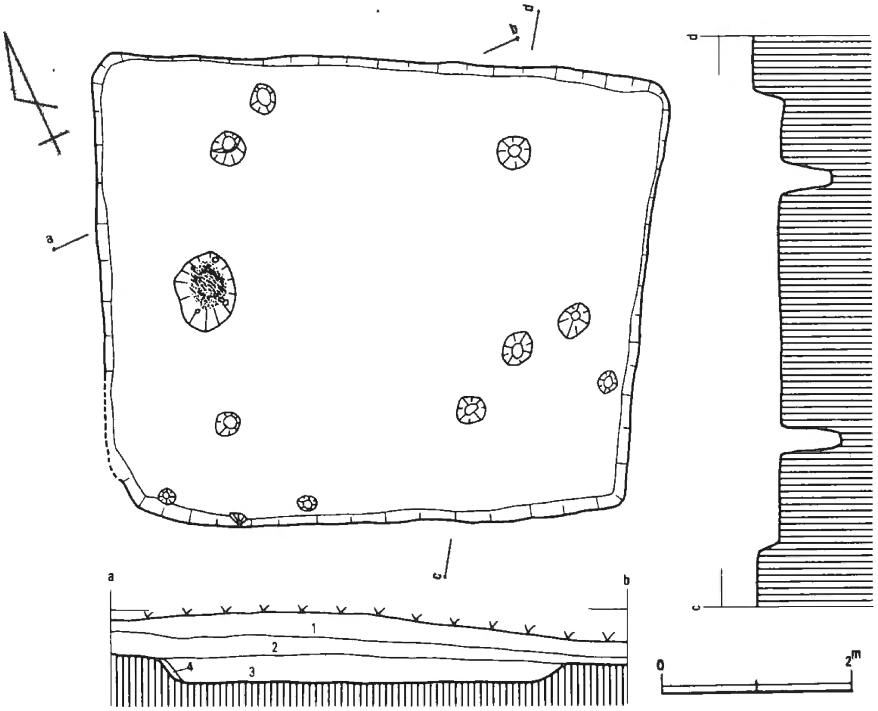
東側傾斜面の岬状の台地先端部において、縄文前期の住居址が2基発見されている。これらは、古墳時代の住居址や縄文早期の炉穴と重複したり、その上、後世の耕作などによって攪乱されているので、その全体の様相は把えがたい。しかし、その床面上や覆土中の土器により、この2基が縄文前期の黒浜式期から関山式期に属するものであることは確認されている。両者のうち、比較的平面プランの良く遺存している第5号住居址について簡単に触れておく。

J・D－No.5住居址（第11図）

この住居址は長辺5.5 m、短辺5.0 mの長方形を呈する。周溝は認められず、床面はローム層中に設けられているが、やや軟弱であった。中央より西側に85×65cmの炉址があり、それを取囲むように8口のピットが検出された。これらのうち、いずれが柱穴であり、それらが拡張や重複によるものであるかは、なかなか決め手がない。なお、床面上からすり石1個と土器片が数片出土したのみで、遺物はごく少なかった。しかし、その土器片や平面プランの形態から、この住居址が黒浜式期に属することだけはほぼ確実である。

なお、J・D－No.4住居址は、南東部がH・D－No.5住居址やF・P－No.2～No.4炉穴などと重複しているため、その平面プランは捉えがたい。現存の状態で、3.5×3.0 mのほぼ方形を呈し、床面もやや軟弱で炉址も発見されなかった。しかし、北壁の立ち上がりやローム層中に設けられた床面や6口の柱穴などから、住居址であることは確実である。床面上や覆土中から、関山式および黒浜式の土器片が混在して発見されているので、その所属時期も関山期から黒浜期に属するものと思われる。

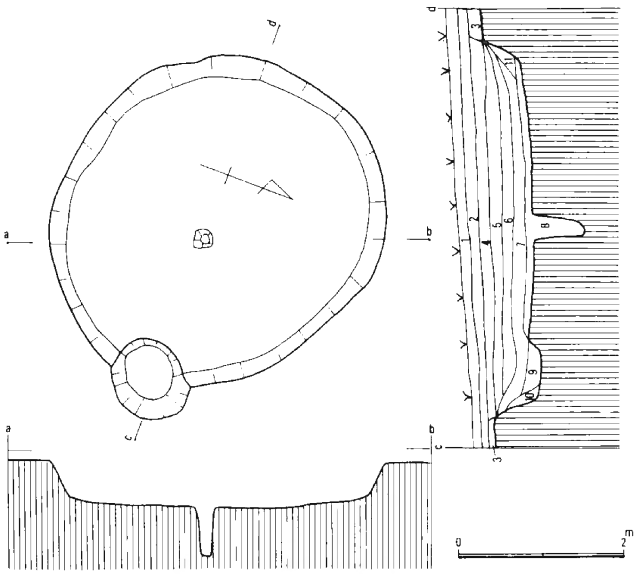
従来、前期の集落は、東京湾沿岸に近い地域の海岸や本谷の低地を見降す台地上に立地するものと考えられてきたが、このように、内陸台地部の台地末端における低地に住居址が存在することは、今回がはじめての例である。今後、前期の集落を捉える上で、きわめて留意すべき問題が提起されたわけである。もちろん、今回のアトランダムなトレンチ設定による2基の住居址の発見は、その周辺にさらに多数の住居址が存在することを暗示しており、それらが集落を構成する可能性は十分にある。とくに、この時期に貝塚が伴っていないことから、中期以降の貝塚の生成・発展の原因を解明する上で、この前期の集落の同一台地上における存在はきわめて重要な役割をもっている。



土層説明

1. 表土攪乱層
2. 縄文前期包含層
3. 黒色土層
4. 暗褐色土層

第11図　加曽利南貝塚東側傾斜面より発見されたJ・D－5住居址　縄文前期（黒浜式期）



土層説明

1. 表土攪乱層
2. 黒暗色土層
3. 暗褐色土層(a)
4. 茶褐色土層
5. 暗褐色土層(b)
6. 暗褐色土層(c)
7. 暗褐色土層(d)
8. 褐色土層
9. 暗褐色土層(e)

第12図　加曽利南貝塚東側傾斜面より発見されたJ・D−15住居址縄文中期(阿玉台式期)

(3)　縄文中期の住居址

第3次発掘調査において、南貝塚の南側平坦部から10基におよぶ縄文中期の住居址が発見された。このうち阿玉台式期に属するもの2基、加曽利E式期に属するものが8基であった。これらのうち、各時期から代表的なものを例示して概観しておく。

J・D−No.6住居址

南貝塚南側平坦部のほぼ中央において発見された竪穴住居址で、床面はローム層を約50cmほど掘りこみ、壁は斜めに湾曲しているが、床面は堅く踏み固められて平坦である。平面プランは長軸を南北にとり5.2m、短軸は東西4.2mで楕円形を呈する。中央に直径約20cm、深さ約1mの柱穴を1口有する。壁の近くに細かいピットがいくつか認められるが、いずれも浅く不定形で柱穴とは考えられない。床面上から阿玉台式土器(第30図−7)が出土しており、規模は小さいが南関東における阿玉台式期の典型的な住居址の形態を示している。

J・D−No.15住居址(第12図)

No.6住居址の南東に隣接して発見され、床面はローム層を約50cmほど掘りこんで設けられており、壁が舟形に湾曲し、長軸を南北に約4m、短軸3.5mの楕円形を呈し、中央に直径約20cm、深さ約60cmの柱穴1口を有するなど、No.6住居址と類似している。床面および覆土中よりわずかながら阿玉台式の土器片が出土しているので、同時期の住居址であることは確実である。なお、この住居址の東端に、その壁を切って、直径約1m、深さ約20cmの小竪穴(No.15)が穿たれているが、土器などの伴出遺物がないので、この住居址に伴うものかどうかは不明である。

ところで、南貝塚および北貝塚の貝層部においても、阿玉台式期の住居址が多数発見されている。すなわち、南貝塚においては4基、北貝塚においては12基を数える。しかも、これらの住居址群は台地上平坦部に立地し、床面上にはほとんど貝層を伴っていないのが、一つの共通点となっている。もちろん、南貝塚においても北貝塚においても、阿玉台式期の貝層はきわめて零細ながら貝層部の一端に多少の堆積を残しているし、袋状の小竪穴の中に貝ブロックや混貝土層を伴っているものがある。

したがって、貝塚の生成が阿玉台式期においてすでにはじまっていたことは確かであるが、まだ大型貝塚を形成する上では、それほど大きな役割を果していたとは考えられない。しかし、この時期からすでに、貝殻の集中投棄の場所と日常生活の居住の場とは、かなりかけ離れていたことが暗示されている。その点からみても、貝層部の外側から阿玉台式期の住居址が発見されたことは、集落の生成・発展と貝塚の構成過程との関係を解明する上で、きわめて重要な示唆となるであろう。

J・D－No.7住居址（第13図）

南貝塚南側平坦部の南西端で発見。表土下約1m、ローム層を約40cmほど掘り込んだ床面は、長径5.8m、短径5.3mのほぼ円形を呈する。中央に直径約1mの炉址があり、壁はやや斜めに立ち上がり、その麓に浅い周溝がめぐらされ、それに沿った内側に6口の主柱穴が穿たれている。

床面の中央には、約20cmほどの土層が堆積した上に、直径約2m、厚さ約40cmの貝層がレンズ状に堆積していた。それは、ハマグリを主体とし、シオフキ、アサリ、マガキ、キサゴなどのブロックを含む純貝層または混土貝層の互層となっており、明らかにこの住居址が廃棄された後、多少の期間を置いて、少量づつの貝殻がなんども投入されたことを示している。

床面直上およびその覆土中から出土した土器片によって、この住居址は加曽利EⅡ式に属することが確認された。なお、この南端部に直径約1m、深さ20cmの小竪穴があり、その伴出土器も加曽利EⅡ式で、しかも廃棄後の貝層堆積もあるので、おそらく住居址に伴う貯蔵穴と思われる。

J・D－No.8住居址（第14図）

南側平坦部の南端において発見。ローム層を約50cmほど掘り込んだ床面は、長径5.6m短径5.1mのほぼ円形を呈し、その表面はよく踏み固められている。その中央に直径約1mの炉があり、壁はやや斜めに立ち上がり、それに沿って周溝がほぼ全周している。柱穴は南北に1本づつ、その内側にそれぞれ浅い支柱穴を伴う。結局、主柱は2本で、この屋根組みの構造が問題となる。

なお、この住居址の覆土中には、床面に15～20cmほどの土層が堆積した上に、厚さ30～40cmの貝層が堆積していた。この貝層は、ハマグリを主体とし、シオフキ、キサゴ、マガキを混入する純貝層や混土貝層の互層をなしている。この貝層の末端から、深鉢形土器（第39図）がほぼ倒立した形で出土した。この土器は、文様や形態から加曽利EⅡ式に属するが、住居址の床面に密着した土器片も、ほとんど加曽利EⅡ式に属していた。したがって、この住居址の所属時期は、加曽利EⅡ式に属するものと推定した。

ところで、この住居址からは打製石斧、くぼみ石、多孔石、石鏃、軽石製浮子などの石製石と、土器片利用の土錘、小型円盤などの土製品が出土している。また炉址は、土器片で円形に囲まれ、中に焼土と灰が充満しており、その底部から炭化したクルミが約30個ほど検出された。

J・D－No.9住居址（第16図）

南貝塚南側平坦部の南端において、J・D－No.8住居址の北西に隣接して発見された。表土下約1m、ローム層を約20cmほど掘り込んで床面が設けられ、直径約4.5mの不整円形を呈する。中央に直径約1mの炉址があり、周溝は認められなかった。東西に1口づつの柱穴がある。そのほかに3口のピットがあるが、深さも浅く太さも一定しないので、柱穴とは考えられない。床面上および覆土中から加曽利EⅡ～EⅢ式の土器片が出土し、加曽利EⅡ式の深鉢形土器が発見されているので、この住居址の所属も加曽利EⅡ～EⅢ式と判定せざるをえない。

なお、この住居址にも廃棄後に堆積した少量の貝ブロックが伴っており、ハマグリ、シオフキ、キサゴなどが主体を占めていた。また、床面上から打製石斧、磨石、くぼみ石、土錘などが出土している。さらに東端部には、直径約1.6m、深さ約50cmの小竪穴が伴っている。その伴出土器も加曽利EⅡ～EⅢ式に属しており、その埋没状況を断面でみると、その廃棄の時期が住居址とほとんど変らないので、おそらくこの住居址に伴う貯蔵穴であったと思われる。

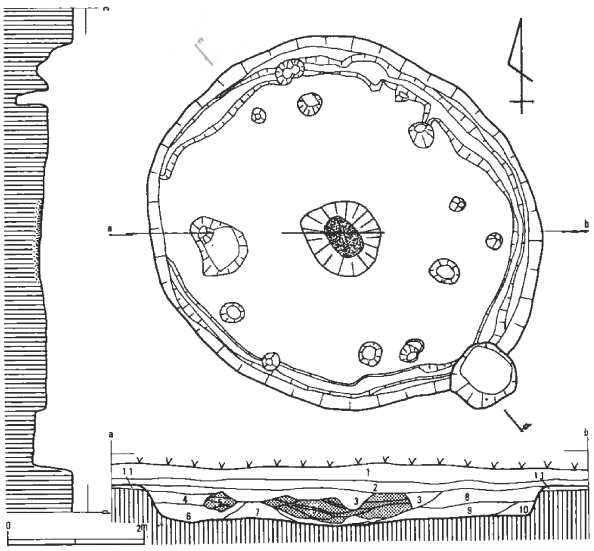
J・D－No.11住居址（第17図）

南貝塚南側平坦部の東端で発見された。表土下約1m、ローム層を50～60cmほど掘り込んで床面が設けられ、東西7.2m、南北6.8mのほぼ円形を呈し、今回発見された縄文中期の住居址の中では最大の規模をもつ。中央に直径約1.2mの炉址をもち、壁は斜めに立ち上がり、その裾に周溝が全周する。それに沿って、直径30～60cm、深さ30～60cmの柱穴がほぼ等間隔に6口穿たれている。

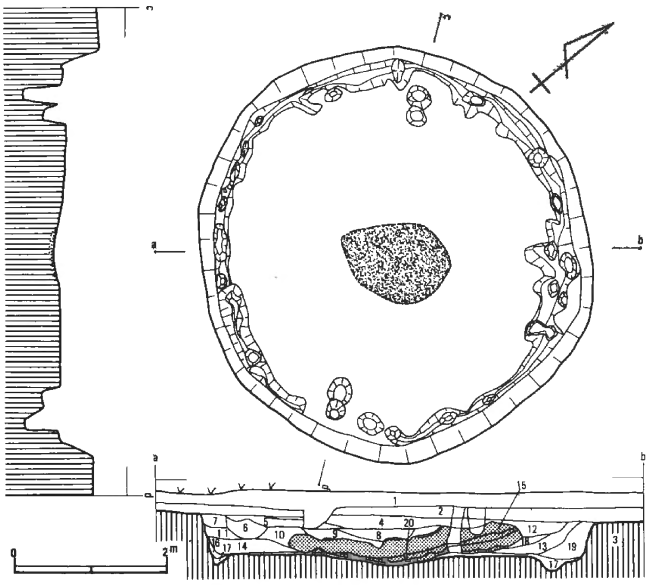
床面上から、石鏃、打製石斧、小型磨製石斧、磨石、軽石製浮子などの石器が出土し、伴出する土器片は加曽利EⅡ式であった。この住居址も同時期に属するものと判定した。床面上の中央部には、廃棄された後に投入された貝の層が、直径約5m、厚さ20～30cmにわたってレンズ状に堆積していた。この貝層も、ハマグリ、キサゴ、マガキ、アサリなどを主体とする純貝層および混土貝層の互層をなしていた。

土 層 説 明

1　表土攪乱層
2　黒褐色土層
3　暗褐色土層
4　暗茶褐色土層
5　貝　　層
6　淡黄褐色土層
7　暗褐色土層
8　褐 色 土 層
9　暗褐色土層
10　褐 色 土 層
11　茶褐色土層



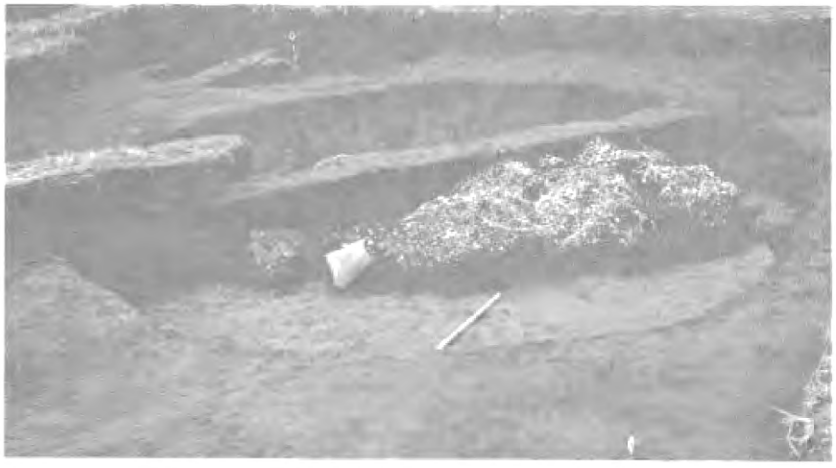
第13図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見されたJ・D—7住居址　縄文中期（加曽利E II式期）



土　層　説　明

1	表土攪乱層	11	茶褐色土層
2	黒褐色土層	12	黒褐色土層
3	暗褐色土層	13	黒褐色土層
4	黒色有機質土層	14	茶褐色土層
5	茶褐色土層	15	純　貝　層
6	ロームの二次堆積	16	暗黄褐色土層
7	3層の流入層	17	淡黄褐色土層
8	黒褐色土層	18	茶褐色土層
9	黒褐色土層	19	淡茶褐色土層
10	淡黒褐色土層	20	灰　　層

第14図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見されたJ・D—8住居址　縄文中期（加曽利E III式期）



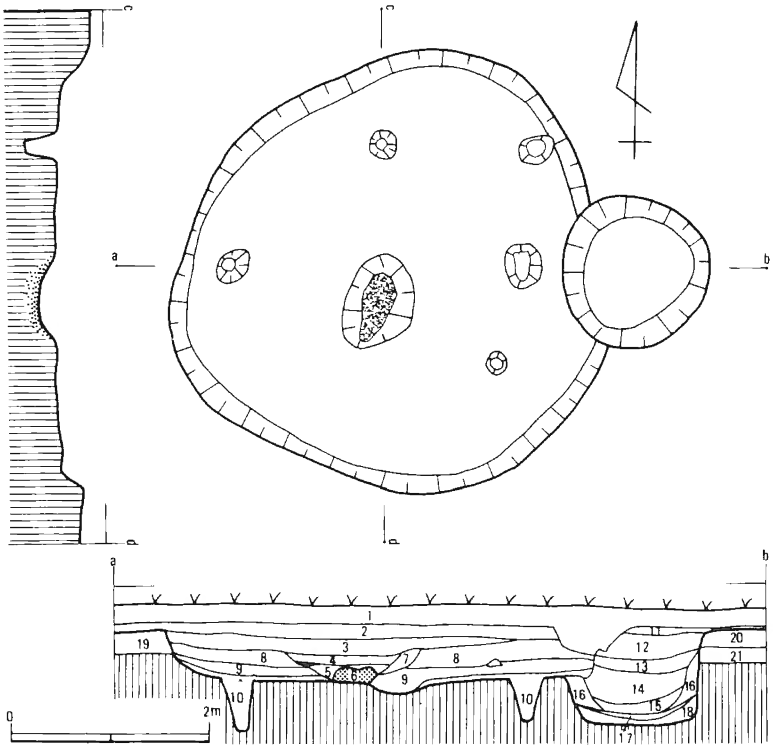
第15図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見されたJ・D—8住居址

そのほか、縄文中期に属する住居址としては、南貝塚南側平坦面の中央部から、J・D－№10、№12、№13および№14住居址が発見されている。この4基は、いずれも加曽利EⅡ式に属し、その床面上にも覆土中にも貝層は伴っていなかった。この第3次発掘調査において、実際に発掘された市松状グリッドによって発見された範囲内においては、この平坦部の中央に貝層を伴わない住居址が集中し、その周辺を取り囲むように展開している住居址には、その廃棄後に投入された貝層を伴っているという興味深い現象がみられた。

なお、これら貝層を伴わない住居址のうち、№12および№13住居址は、約10mほどへだてて南北に隣接しており、ともに長径5.5m短径4.8mの不整円形を呈し、加曽利EⅡ式に属しているが、前者には柱穴4口と周溝がめぐり、後者には柱穴5口で周溝がない。また、一方では床面の東端に、他方では西端に、それぞれ直径約1m、深さ60～70cmの貯蔵穴を伴っており、ともに床面上から浮子と土錘を出土している点は共通している。

また、№10と№14住居址は重複しており、№10住居址が№14住居址の南東端を切って、床面を設置している。№14住居址は、長径6.2m短径5.6mの不整円形を呈し、加曽利EⅡ式期に属しているが、床面上からは土器片以外にほとんど遺物は出土しなかった。№9住居址は、直径約4.5～4mのほぼ円形で、加曽利EⅡ～EⅢ式期に属し、その床面からは小型磨製石斧や土錘のほか小型土器が出土しており、その土器の型式からみても、№14住居址より新らしいことがわかる。

以上のように、縄文中期の住居址が、南貝塚の貝層部から約100mほど離れた南側平坦部において、集中的に分布しており、その約半数のものが廃棄された後に投入された貝層を伴ない、半数のものが全く貝層を伴っていなかった。しかも、発掘された範囲内においては、中心部に貝層を伴わない住居址のみが集中し、その周囲を取り囲むように、貝層を伴う住居址が展開している。この現象が、いかなる意義をもっているか、これだけの事例だけで論ずることは早計であるが、少くとも、馬蹄形貝塚の貝層部の内側に存在する住居址のほかに、その周辺にも同時期の住居址がかなり数多く分布していることだけは確実となった。



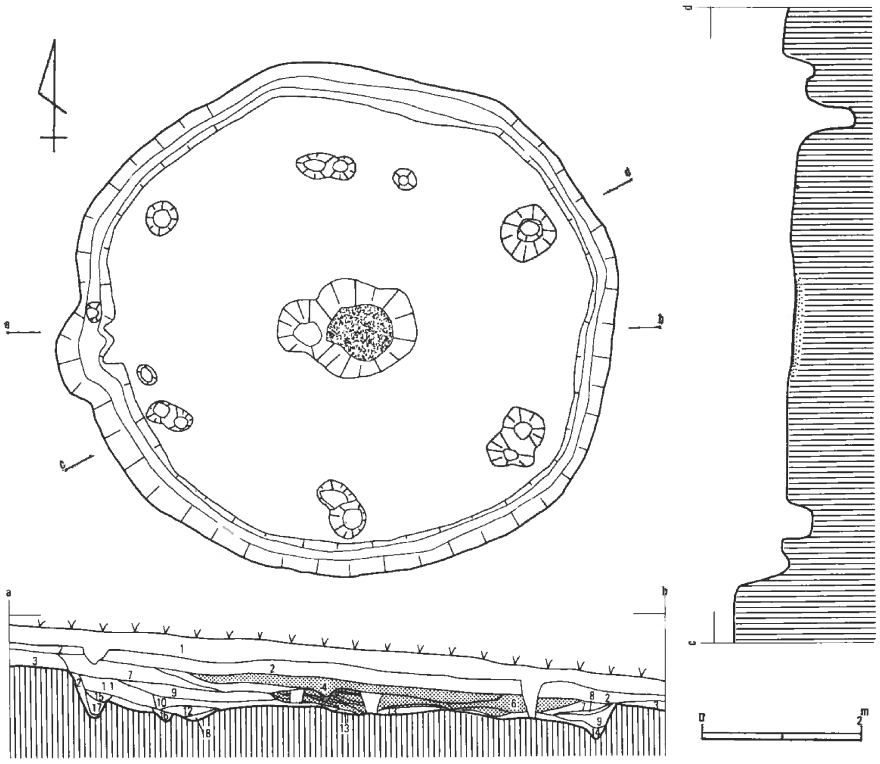
土層説明

1 表土攪乱層
2 黒褐色土層
3 暗褐色土層
4 淡黒褐色土層
5 淡茶褐色土層
6 貝　　層
7 茶褐色土層
8 淡褐色土層
9 暗褐色土層
10 淡褐色土層
11 黒褐色土層
12 茶褐色土層
13 淡茶褐色土層
14 茶褐色土層
15 暗褐色土層
16 淡黄褐色土層
17 茶褐色土層
18 淡黄褐色土層
19 茶褐色土層
20 茶褐色土層
21 淡褐色土層

第16図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見されたJ・D－9住居址　縄文中期（加曽利EⅡ～Ⅲ式期）

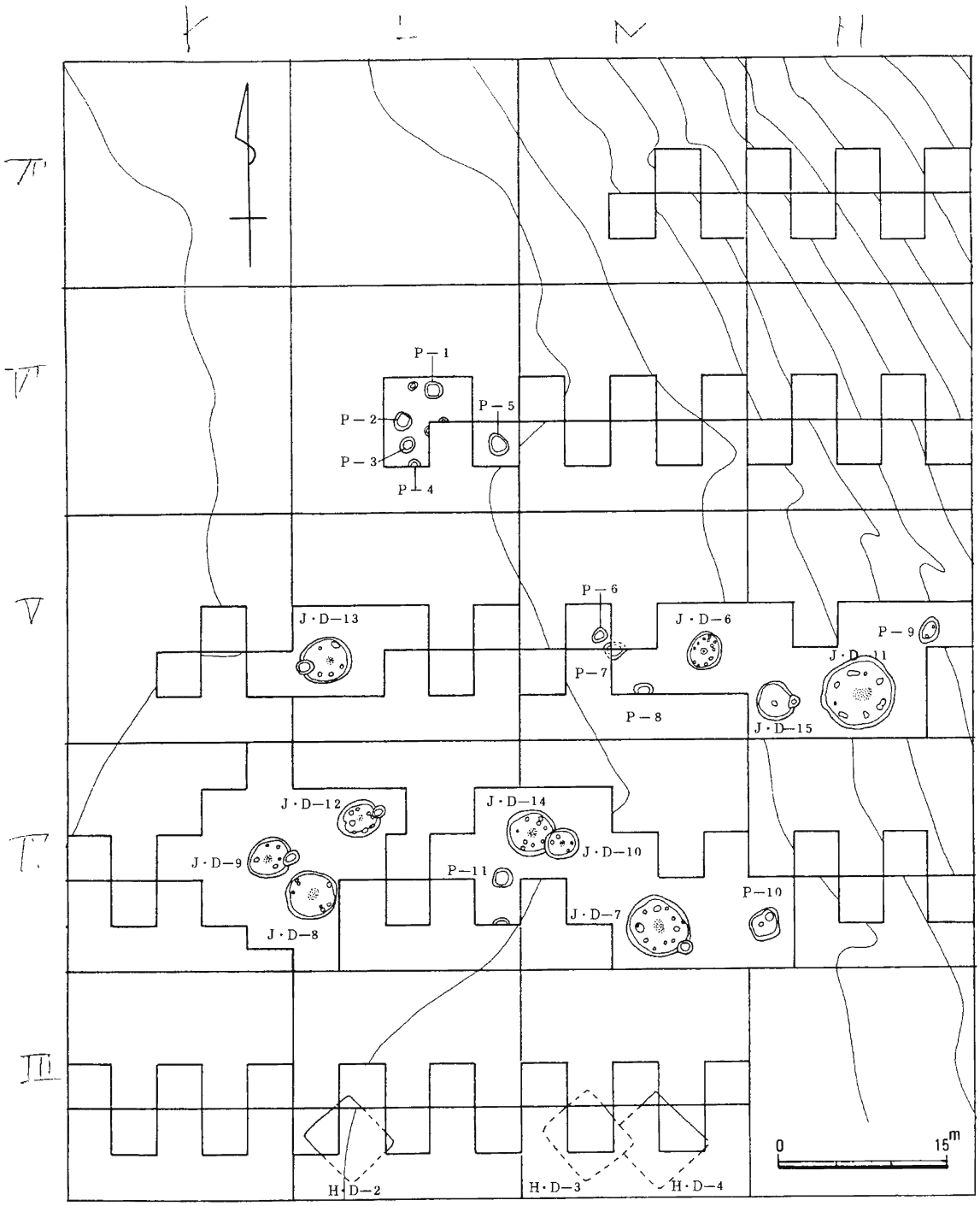
土層説明

1 表土攪乱層
2 黒褐色土層
3 暗褐色土層
4 純　貝　層
5 暗褐色土層
6 純　貝　層
7 淡茶褐色土層
8 淡茶褐色土層
9 淡茶褐色土層
10 褐色土層
11 淡褐色土層
12 暗褐色土層
13 暗茶褐色土層
14 キサゴ破砕層
15 暗褐色土層
16 暗褐色土層
17 淡暗褐色土層
18 淡褐色土層



第17図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見されたJ・D—11住居址　縄文中期（加曽利EⅡ式）

第18図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見されたJ・D—10（右）およびJ・D—14住居址（左）
縄文中期（加曽利EⅡおよび加曽利EⅡ～Ⅲ式期）



第19図　加曽利南貝塚南側平坦部における遺構の分布図

J・D－№……縄文時代住居址、　P－№……縄文時代小竪穴、　H・D－№……古墳時代住居址（未発掘）

第３表　加曽利南貝塚南側平坦部発見の小竪穴一覧表

No.	形　態	規　模		柱穴	所属時期	出　土　遺　物	備　　考
		長径×短径（cm）	深さ（cm）				
P－1	円　形	直径　135	34	なし	加曽利EⅡ	土器片	
P－2	円　形	直径　110	65	なし	加曽利EⅡ	円形土製品、軽石	
P－3	楕円形	155×125	62	なし	加曽利EⅡ	土器片	
P－4	不　明	100	25	なし	加曽利E	なし	一部発掘
P－5	楕円形	165×137	32	1口	加曽利EⅡ	土器片、土錘	底部に焼土層
P－6	楕円形	125×95	30	なし	加曽利EⅢ	底部欠損深鉢形土器	土坑墓か
P－7	楕円形	125×95	27	なし	加曽利EⅢ	土器片	
P－8	円形？	直径　115	32	なし	加曽利EⅡ	土器片、土錘	
P－9	楕円形	250×175	54	2口	加曽利EⅡ	有孔鍔付土器、土錘	カキ純貝層あり
P－10	不整円	225×210	70	1口	加曽利EⅢ	土器片、軽石製浮子	
P－11	不整円	直径　145	22	なし	加曽利EⅢ	土器片	

(4)　縄文中期の小竪穴

第３次発掘調査によって、加曽利南貝塚南側平坦部においては、合計11基の小竪穴が発見された。これらはすべて加曽利E式期に属しており、そのうち、加曽EⅡ式期に属するもの６基、加曽利EⅢに属するもの４基、不明のもの１基である（第３表参照）。その分布の様相をみると、発掘された調査区に関するかぎりでは、加曽利EⅡ式の小竪穴は北端に集中し、加曽利EⅢ式の小竪穴は南東端に遍在する傾向にある。逐一詳述するいとまがないので、主な小竪穴について概観するに止めたい。

P－No.5小竪穴（第20図）

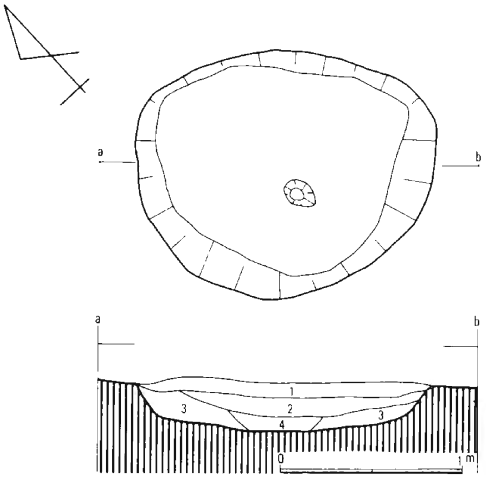
南貝塚南側平坦部の北端に、P－1～P－5までの小竪穴が集中しており、プランは、直径1～1.3 m、深さ25～65cmの円形または楕円形を呈し、その規模・形態はほぼ類似しており、その時期もすべて加曽利EⅡ式期に属している。これらのうち、長径165、短径137cmの楕円形を呈し、比較的規模が大きいのがこの小竪穴である。表土下約60cm、ローム層を約32cmほど掘り込んで、やや皿状に凹んだ底面が設けられている。この底面には厚さ８cmほどの焼土層が堆積しており、その上面から加曽利EⅡ式の土器片とともに土錘が１ケ出土している。なお、底面の中央よりやや南寄りに、直径14～16 cm、深さ36cmのピットが１口穿たれている。おそらく、これを主柱として、円錐状の屋根を葺き降したもので、貯蔵穴であったと思われる。

P－No.6小竪穴（第21図）

南貝塚南側平坦部のほぼ中央で、J・D－No.6住居址の西側に隣接して発見された。表土下約50cm、ローム層を約30cmほど掘り込んで、舟底形の底面をなし、プランは長径125cm、短径95cmの楕円形を呈する。この西端部において、口縁部が底面に接して倒立した形で、加曽利EⅡ式の深鉢形土器が発見された。この土器の内部に、人骨の骨片などは残っていないが、元来甕被葬で、屈葬人骨の頭部にかぶせた土器だけが残って、人骨は消失してしまったとも考えられ、この小竪穴が墓坑であった可能性もある。しかし、この底面は、土器の出土地点がもっとも深く、それに向って傾斜している。それに、人骨を埋葬するにはあまりに浅すぎるきらいがあり、にわかに墓坑とするには根拠が稀薄である。それよりも No. 6 住居址と同時期に属し、ごく近距離（約７ m）にあることから、むしろ食糧などの貯蔵穴であったと考えるべきであろう。

P－No.9小竪穴（第22・23図）

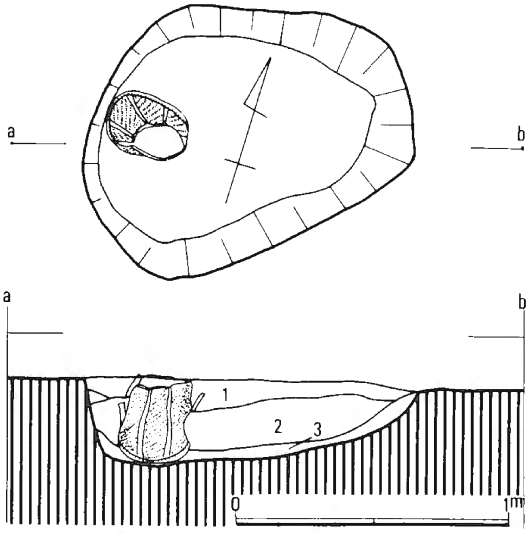
南貝塚南側平坦部の最東端において、J・D－No.11住居址の北東に隣接して発見された。表土下約90cm、ローム層を35cmほど掘り込んで、平坦な床面が設けられ、プランは長径250cm、短径175cmの長円形を呈する。壁は舟底形に湾曲しながら斜



土層説明

1. 暗褐色土層　　2. 暗褐色土層
3. 黄褐色土層　　4. 焼　土　層

第20図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見されたP—5小竪穴　縄文中期（加曽利EⅡ）



土層説明

1.暗褐色土層　2.暗褐色土層　3.褐色土層

第21図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見されたP—6小竪穴　縄文中期(加曽利EⅢ式)

めに立ち上がり、その北東端と南西端に1対の柱穴が穿たれている。この床面上に約10cmの土層が堆積した上に、ほぼ中央部に50cm×20cmの範囲に厚さ5～6cmの焼土が層状に堆積していた。

なお、この小竪穴からは、有孔鍔付土器と土錘が出土しており、これを埋葬などの特殊な遺構と考えるよりは、生活や生産と関連する一種の貯蔵穴と考えるべきであろう。とくに、№11住居址の近く（約4m）にあり、同じく加曽利EⅡ式期に属する小竪穴と住居址である以上、両者の関連はかなり密接であったと考える方がはるかに自然であろう。

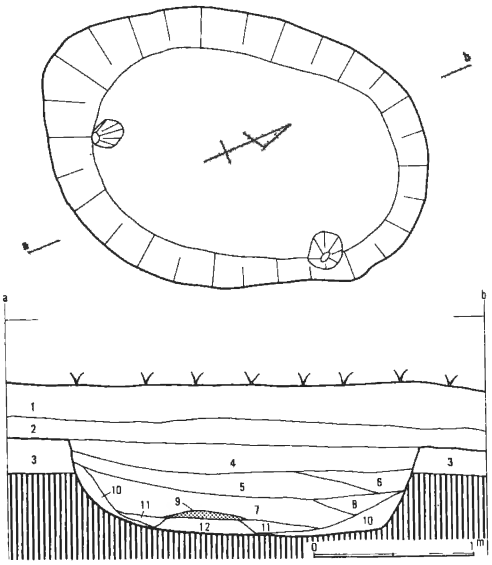
P－№10小竪穴（第24・25図）

南貝塚南側平坦部の南東端において、J・D—№7住居址の東側に隣接して発見された。表土下約1.3m、ローム層を約90cm掘り込んで平坦な床面が設けられている。プランは、長径225cm、短径210cmの不整円形を呈する。中央に、直径約25cm深さ60cmの柱穴が1口あり、北端にもう1口、直径約40cm、深さ約30cmのピットが伴っているが、これは口が鉢形に開き底が浅いので柱穴とは考えられない。

なお、この小竪穴が約40cmほど埋没した後に、カキが投入され、ブロック状の純貝層となって堆積していた。また、覆土中から加曽利EⅢ式の土器片と軽石製の浮子が出土している。この伴出遺物からみても、竪穴の構造からみても、これが貯蔵穴であることはほぼ間違いなかろう。しかし、隣接する№7住居址とは、その所属時期が異なるので、直接の関係があったとはいえない。いずれにしても、加曽利EⅡ式からEⅢ式の時期においては、貯蔵穴が住居址に接着する場合と、屋外に別に設置される場合とがあり、その機能的な相違があった可能性だけは予測できるであろう。

以上のように、この南側平坦部における小竪穴は、P－1～P－5のように住居址からかけ離れた場所に独立して集合しているものと、住居址の近くにそれぞれが分離しながらも住居址との関連が緊密なものと、それに、住居址自体に接合しているものと、少なくとも3種の形態が認められる。その上、構造的にも、柱穴をもつものともたないもの、掘りの深いものと浅いもの、底が平坦なものと舟底形のものなど、さまざまな様相を呈している。これらをすべて同一の性格や機能をもつものとして捉えることは、いささか乱暴であろう。

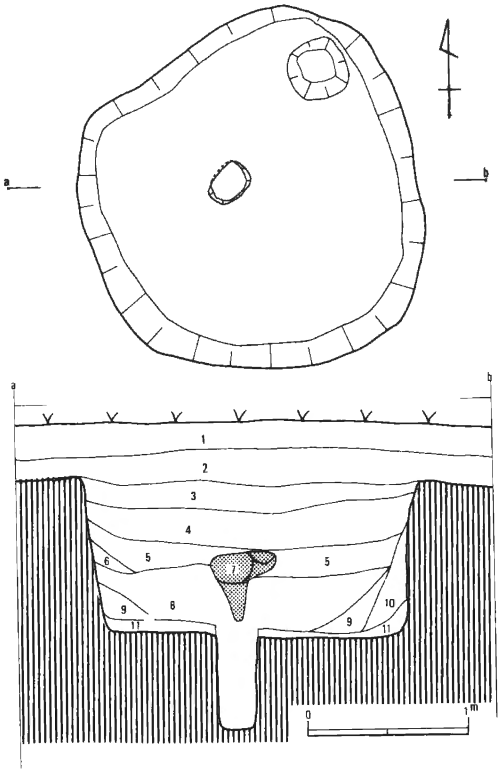
しかし、これらの小竪穴からは特殊な遺物や埋葬人骨や家犬骨などの伴出はなく、むしろ、日常用品や生活用具、あるいは廃棄後の堆積とはいえ貝類などが投入されているところから、個々の住居や集落全体の生産や生活と密着したものであったと考えるべきであろう。



土層説明

1. 表土攪乱層　7. 暗褐色土層
2. 黒褐色土層　8. 褐色土層
3. 暗褐色土層(a)　9. カキ純貝層
4. 暗茶褐色土層(b)　10. 帯黄褐色土層
5. 茶褐色土層　11. 暗黄褐色土層
6. 茶褐色土層　12. 暗黄褐色土層

第22図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見されたP—9小竪穴　縄文中期（加曽利EⅡ式）



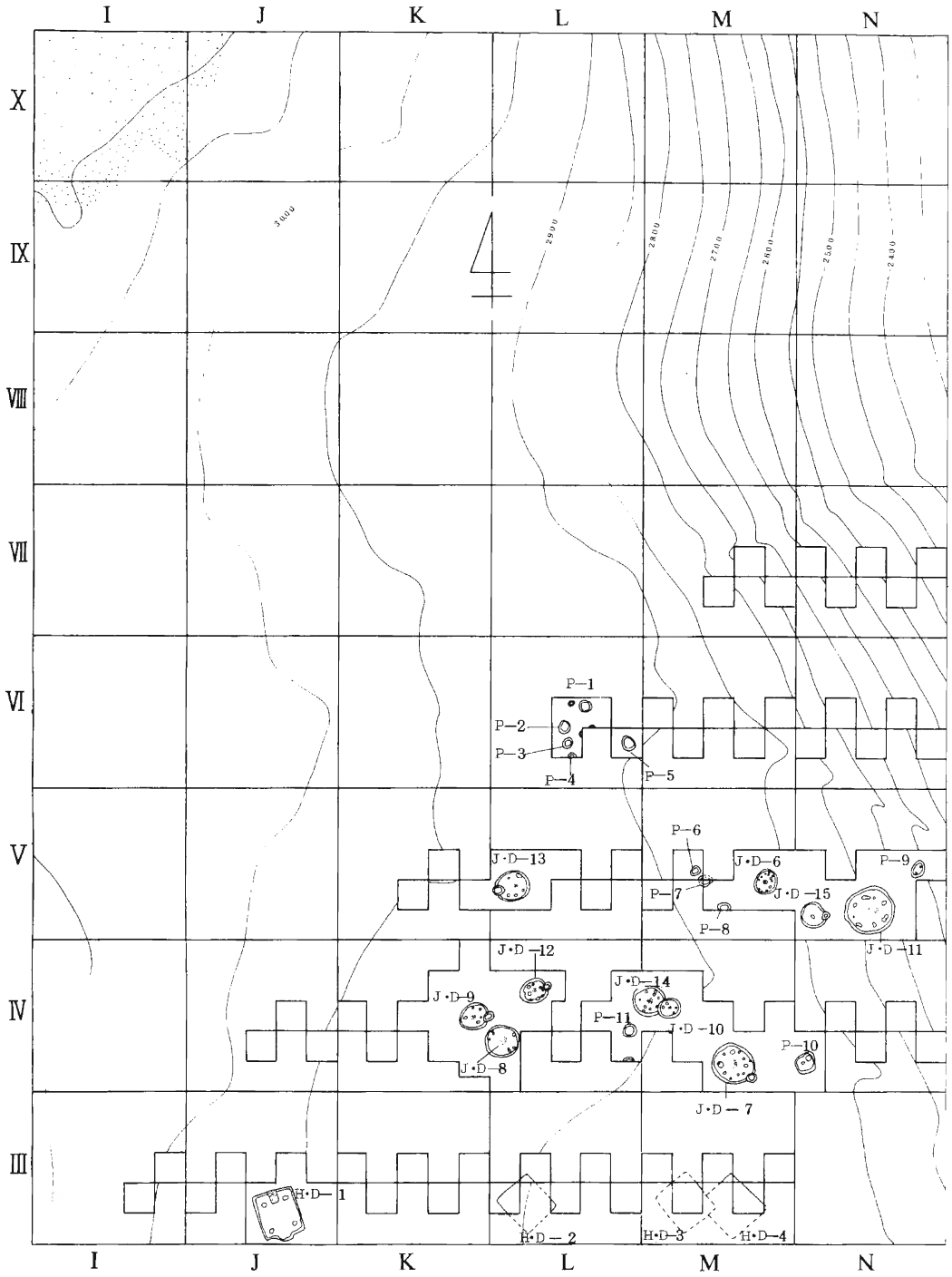
第23図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見されたP－9小竪穴

土層説明

1. 表土攪乱層　5. 黒色土層　9. 黄褐色土層
2. 黒褐色土層　6. 黄褐色土層　10. 黄褐色土層
3. 黒褐色土層　7. 混土貝層　11. 黄褐色土層
4. 茶褐色土層　8. 黄褐色土層　12. ソフトローム層

第24図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見されたP—10小竪穴　縄文中期（加曽利EⅢ式期）

第25図　南側平坦部より発見されたP—10小竪穴



第26図　加曽利南貝塚南側平坦部における発見遺構の分布概念図　（昭和45・46年度　第1次〜第3

O
P
Q
R
S
T
J・D−4
H・D−5
F・P−1
F・P−4
F・P−2
F・P−3
J・D−5
F・P−5
J・D−3
J・D−1
X
IX
VIII
VII
VI
V
IV
III
21 22 23 24 25
16 17 18 19 20
11 12 13 14 15
6 7 8 9 10
1 2 3 4 5
0
40m

次発掘調査）

(5) 縄文後期の住居址

第2次発掘調査によって、南貝塚の東側傾斜面において、縄文後期の住居址が2基発見された。そのうち1基は加曽利BⅠ式期のものであり、他の1基は安行Ⅰ式期のものであった。それらの周辺部にも、他の地点と同じ間隔で市松状のグリットによる試掘が行われたが、その他に後期の住居址は1基も発見されなかった。

J・D－No.3住居址（第27図）

東側傾斜面のほぼ中央部、ゆるやかな傾斜の中で、わずかに尾根状になった背の部分から単独で発見された。表土下約80*cm*、ローム層を高い方で約30*cm*、低い方で約15*cm*ほど掘り込んで床面が設けられている。それは、東西方向はほぼ水平だが、南から北に向ってわずかに傾斜している。

竪穴全体の平面プランは、長径5*m*・短径4.6*m*の卵形を呈し、その主軸が磁北の方向にほぼ一致している。壁は舟べり状に斜めに立ち上り、周溝はないが、壁に沿ってほぼ等間隔に15口の柱穴が楕円を描きながら並んでおり、その内側にさらに1列、外側の柱列と食違いに、やはりほぼ等間隔に15口の柱穴が楕円を描いて並んでいる。しかもその柱列の北端の2口は間隔が広く開いており、それぞれの内側に1対の柱口が穿たれている。これらの配置から、この部分に戸口が開かれていたものと思われる。

なお、床面の中央に、長径1*m*・短径80*cm*ほどの長大な炉址があり、その東端部から双口異形土器（第30図－1）が出土している。この特殊な土器の存在や、柱列などの特異な構造からみて、この住居址がきわめて一般的でない様相を呈するといえよう。伴出土器や双口異形土器の型式から、この住居址は加曽利BⅠ式期に属している。

J・D－No.1住居址（第28・29図）

東傾斜面の南端部において、やはりゆるやかな尾根の背の部分から発見された。表土下約60*cm*、ローム層を約30*cm*ほど掘りくぼめて床面としている。長径4.4*m*・短径4*m*の楕円形を呈し、壁は皿状にゆるやかに立ち上がり、周溝は伴わない。北端部に攪乱があるため、形態や規模に多少不明一な点がある。床面中央に長径90・短径70*cm*の炉址があり、壁に沿って小穴が7口めぐっている。

柱穴は、炉の周辺にある直径30～50*cm*、深さ25～35*cm*のピットがそれと思われるが、あまりに炉に近く、配置が乱脈なので屋根組みの構造がむづかしくなる。床面直上には、焼土や炭化物を多量に含んだ黒褐色土が一面に覆っており、その層の中から安行Ⅰ式の土器が出土した。この住居址の時期も安行Ⅰ式に属するものと判定した。

この加曽利貝塚において、安行Ⅰ・Ⅱ式に属する住居址は、これまでの度重なる調査においても、北貝塚から2基、南貝塚から1基、合計わずか3基が発見されているにすぎない。貝塚においても、安行Ⅰ・Ⅱ式に属する貝層堆積はきわめて小規模である傾向があり、それと併せて考えてみると、この時期の加曽利貝塚における集落は、ごく零細で散在的であったと推察される。

小　　結

以上、きわめて粗笨ながら、今回、南貝塚の南側平坦部および東側傾斜面において発見された集落遺構について簡単な概観を試みた。これをみてもわかるように、老人ホーム建設の予定地の変更に伴って、担当課の指示する区域を調査の対象としてきたので、その調査地区の選定は、学術的には全く無差別に抽出した結果になった。ところが、その地区ごとに、発見される遺構の様相が異なり、各時期ごとに、集落の占地する地点が変化していることが判明した。しかも、従来、加曽利貝塚においては予測だにしなかった、縄文早期の炉穴群、縄文前期の住居址、縄文中期の集落、縄文後期の住居址、そして古墳後期の集落が、馬蹄形貝塚の外側から発見されたことは、大きな発見であり、貴重な収穫であった。

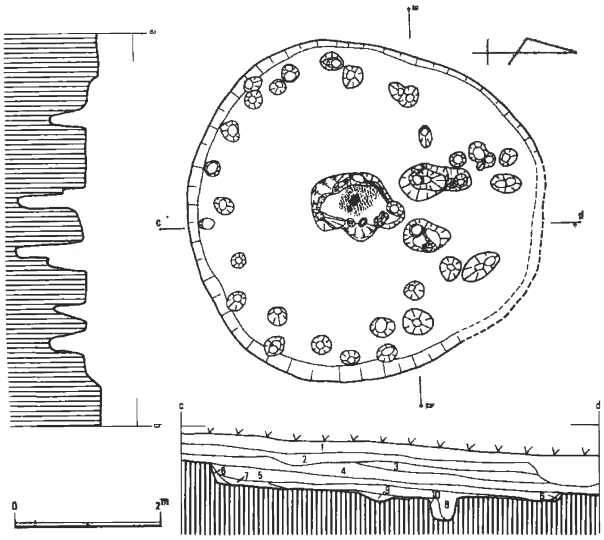
とくに、ここで強調しておかねばならないことは、この加曽利貝塚という遺跡が、ただ単なる中期や後期の大型馬蹄形貝塚ではなく、その貝塚が発達する以前から、この地区に各時期の集落が営まれ、その集落の発展や推移の過程において、ある時期に大型貝塚が形成された。しかも、その貝塚が消滅した後にも、断続的ではあるが、この地区が集落立地として選ばれているのである。したがって、まず、この遺跡は、集落として捉え、その集落の生成―発展―消滅の過程においてこそ、貝塚の存在意義を定着すべきである。加曽利貝塚は、それをなしうるに十分な要素と可能性をもっていることを、まず銘記すべきであろう。

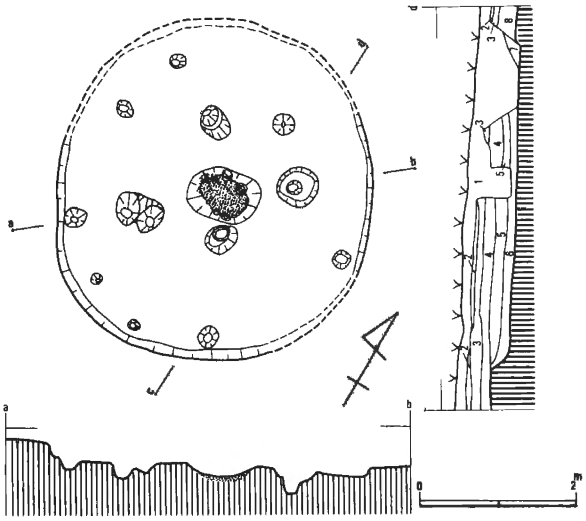
（後　藤　和　民）

図27図　加曽利南貝塚東側傾斜面より発見されたJ・D—3住居址　縄文後期（加曽利BⅠ式期）

土層説明

1. 表土攪乱層
2. 黒褐色土層
3. 暗褐色土層(a)
4. 暗褐色土層(b)
5. 暗褐色土層(c)
6. 暗褐色土層(d)
7. 暗褐色土層(e)
8. 暗褐色土層(f)
9. 黒褐色土層
10. 暗褐色土層





第28図　加曽利南貝塚東側傾斜面より発見されたJ・D—1住居址　縄文後期（安行Ⅰ式期）

土層説明

1. 表土攪乱層
2. 焼土混りの黒色帯
3. 黒褐色土層
4. 暗褐色土層(a)
5. 暗褐色土層(b)
6. 暗褐色土層(c)
7. 暗褐色土層(d)
8. 暗褐色土層(e)

第29図　加曽利南貝塚塚東側傾斜面より発見されたJ・D—3住居址

Ⅳ　おもな出土遺物

昭和45・46年度の調査によって発掘された遺物類の量は意外に多く、内容も多彩である。これは調査区域が、台地上から水田近くの低地部分にかけて、かなり広範囲に及んだことと、この地域における文化層の時期が、予想外に長期に亙っていたことによるものである。たとえば、この区域から今回発掘された遺物類は、縄文時代早期～晩期のほとんどの時期のものがみられ、住居址等の遺構も数多く発掘され、一部区地域では古墳時代の住居址も数基発見されている。しかし、これら当時の遺構や文化層は、調査区域内に全面にわたって間断なく存在しているわけではなく、時期によって偏在している。

縄文時代の生活遺構は、南貝塚に近い台地上で中期（阿玉台式、加曽利ＥⅡ式）の竪穴住居址が10基（第２表）、ほぼ同時期の貯蔵穴などのピットが11基（第３表）、直径約60ｍの範囲に群をなして発見され、水田に近く、ちょうど谷に向って岬状に突出した平坦部からは、早期茅山式期の炉穴が５基と前期黒浜期の方形住居址が発見された。そして、台地上と水田近くの平坦地を結んだ、ゆるやかな傾斜面から、後期・加曽利ＢⅠ式期と安行Ⅰ式期の住居址（Ｊ･Ｄ－１、Ｊ･Ｄ－３）が発見された。いっぽう、古墳時代の住居址は、台地上では、南貝塚から南方へ遠く離れた台地縁辺に近い部分から、真間式期のものが１基（Ｈ･Ｄ－１）発掘され、その他に、未発掘ではあるが、３基の存在が確認されている。また、水田に近い平坦地からは、鬼高式期の住居址、（Ｈ･Ｄ－５）も発見されている。その他に、遺構こそ未発掘であったが、縄文早期の井草式土器や前期諸磯式・浮島系土器も発見されている。とくに、この前期後半の土器群は、Ｒ・Ｓ－Ⅸ・Ⅹ区の直径40ｍ程の第３層（黒褐色土層）～第５層（暗褐色土層）から集中して出土しているのが注目される。

以上、各時期に亙る遺構や文化層より発見された遺物は、圧倒的に土器片が多い。しかし、完形品や復原可能土器は、意外と少なく、第１図～第10図に掲げる程度のものである。しかもこれらは、Ｊ･Ｄ－№３住居址のように、住居址からまとまって出土したものは少なく、Ｊ･Ｄ－№６住居址の主柱穴上に埋没していた阿玉台式の深鉢（第30図７）や、Ｊ･Ｄ－№８住居址の貝層中に投げ捨てられた状態の加曽利ＥⅡ式の深鉢（第39図右）などのほか、Ｐ－№６小竪穴内出土の深鉢（第30図８）や第30図４･５などのように、複数出土のものより単独のものが目立った。

次に多いのは土製品であるが、このうち、土器片利用の土錘が多量である。これらは、後の表にみるとおり、形態的には、紐かけのない、いわゆる土製円盤状のものが多く、次いで、上・下２箇所に紐かけをキザんだものが多い。土器片の時期は加曽利Ｅ式の土器片利用が多く、全体の76％を占める。土製耳飾りは４点発見されているが、この中には縄文時代前期の土製抉状耳飾りが２点含まれている。

石器は、石製品を含めると、昭和45・46年度の調査によって、総数１５８点が出土している。これらのうち、最も多いものが磨石で、32点（昭和45年・14点）発見されている。いずれも、径５ｃｍぐらいの小型のものが多く、石質は硬砂岩製のものが多い。

次いで、打製石斧が21点（昭和45年・10点）出土している。これらはほとんど半分欠損しており、完形品は３点しかない。

石鏃も19点（昭和45年10点）出土し、石質は黒曜石８点、チャート８点、不明３点である。

その他は、石皿、浮子（軽石を含む）が、いずれも両年度分を合わせると10点以上出土している。これらの詳細については本報告で述べ、ここでは概略的解説にとどめたい。

なお、昭和46年度に調査した台地上平坦部の加曽利ＥⅡ式を主体とする住居址群には、その内部に小貝塚を包含するものが４基確認されているが、骨角貝器、牙器の類は極めて少なく、貝層採集資料を精査後、貝類等の自然遺物と合わせて、改めて報告したい。

(1)　縄文時代の遺物

土器（第30図１～８、第31図～第39図）

１(Ａ･Ｂ)胴部直軽13ｃｍ、器高11ｃｍを測る、小型の双口異形土器である。この土器は他に見られるように土器が２つ接合したものでなく、胴部はドーナッツ状に膨らんでおり、この上部に直径５ｃｍの口が２個付いている。下には加曽利ＢⅠ式の浅鉢にみられるような脚部が高台状に廻らされている。１－Ａは正面図、１－Ｂは測面図である。土器表

面の文様、胎土や焼成の状態など、加曽利ＢⅠ式の特徴を備えている。

本土器はJ・D－№.3住居址の炉（直径1.3 m×0.9 m）の内部より出土した。この出土状態もさることながら、従来、各地で報告されている数ある双口土器の中でも特に異形を呈しており、その用途については非常に興味深い。本土器の用途については出土状態から内部の内容物（液体）を炉で暖めたものということも考えられるが、土器の内・外面には著しい煮沸の痕跡はみられない。本土器は、昭和51年、盗難にあい、形態を復することができないほどに、打ち壊されてしまった。現在では2～3片しか残っておらず、現時点で、より詳しい観察は不可能となってしまった。

2.3.もＪＤ－№.3住居址内の出土であるが、床面より20cmほど浮いた状態で出土した。2は口縁部に小突起1を備えた小型の浅鉢で、胴部には2本の平行線によって窓枠状に仕切られたすり消縄文が施されている。縄文はＬＲ単節である。加曽利ＢⅠ式のものとしては文様帯が底部近くまで及んでいるのが面白い。

3は2より口縁部の外反の度合が小さい小型土器で浅鉢形というより椀形に近い。文様はなく、器面整形痕がやや目立つ。器面外側には粘土紐積み上げ時の成形痕が5段ほど観察できる。

4.はＲⅧ区－12Ｇより単独で出土した。口径10.5cm、高さ12.5cm、完形土器である。この土器は一見ミニチュア風の小型土器でありながら、器面の文様構成や成形、研磨などの成作作業が大型土器と同じように行われている。とくに、器面の無文部の研磨は念入りであり、加曽利ＢⅠ式の如く、てかてかの光沢を持つ。また、器面の色調は異様に赤茶色を呈しており、新井司郎氏の土器製作実験結果からすると、胎土中に多量の酸化鉄を混入した可能性がある。

いずれにしても、小型土器でありながら、手づくねでなく、精巧に仕上げられており、しかも、他の土器に比して明らかに赤色化を意図したような仕上りをみせているところから、本土器の用途は日常生活と離れた、特殊な道具と考えられる。

5. ＫⅣ区－20Ｇ出土。平面形が楕円の浅鉢で、丸底である。口縁の一部欠損、推定長径20cm、短径は16cmである。体部にはＬＲ縄文を地文とし、底部を中心に渦巻を模した文様が施されている。第33図のように口縁直下には、加曽利Ｂ式に特徴的な、指頭圧痕を有する隆起帯が付されているが、図のように口縁の片側だけに限られている。

6は、ＬＶ区－6Ｇより発見されたJ.D－№.13住居址の床面から出土した。口径3.5cm、高さ4.5cmを測る。無頸の小型壺であり、器面の文様は小さいながらも加曽利ＥⅡ式の特徴を残している。しかし、成形は輪づみでなく、手づくねによって造られている。

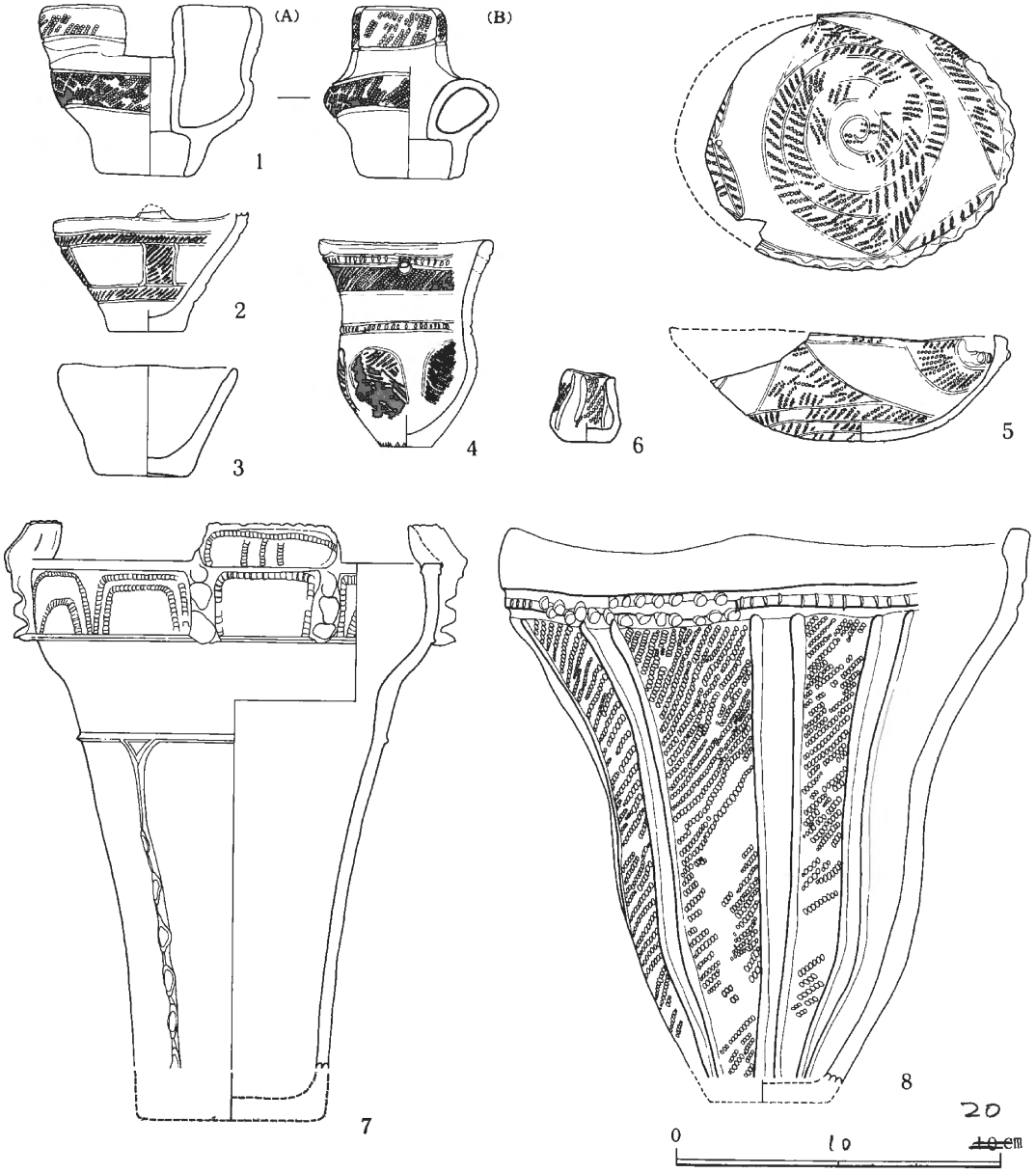
7は、J・D－№.6住居址の中央部の主柱穴直上に押しつぶされたような状態で発見された。口径30.0cm、器高（現残）32.5cmを測る。口縁部4箇所に、外側に開いた「耳状把手」が付き、各把手間の口縁部には押し引き文が施されている。口辺と胴部のくびれめには断面三角形の隆帯が1本回っている。円筒形を呈する胴部には指頭圧痕を施した懸垂文が4本、付せられている。その他は無文である。胴部にはこの時期の特徴である。輪づみ痕や、キザミ目痕はみられないが、耳状把手の施されている状態から、阿玉台のⅡ期頃に相当しよう。

8は、MV区－11ＧのＰ－№.6小竪穴より出土。口径33cm、器高（現残）32.5cmを測る。底部を欠損するが、ほぼ完形の深鉢で楕円形のピット（1.3m×1m）の中に倒立していた。土器内部には骨片等の混入はみられなかったが、出土状況からみて小児用の埋甕に使用されていた可能性が強い。文様は地文にＬＲ単節縄文を施し、器面を太めの平行垂線によって画された磨消縄文帯によって8面に区画している。文様で特異なのは、口縁部を回る平行線間の文様で、太めの円形刺突文と細かいキザミ目文とが交互に施されている。同一個体上にこのような施文の違いがみられるのは珍しい。

石器および石製品（第40図1～16）

石器および石製品は、昭和45年度で58点、昭和46年度は100点、合計158点が確認されており、その内訳は次のとおりである。

		（昭45）	（昭46）	計
1.	磨　　石	14	18	32
2.	たたき石	3	3	6
3.	石　　皿	6	8	14
4.	凹　　石	2	7	9
5.	石　　鏃	10	9	19



第30図　土器実測図

1～3.5　加曽利ＢⅠ式土器　　4.　加曽利ＢⅢ式土器

6．8　加曽利ＥⅡ式土器　　7.　阿玉台式土器

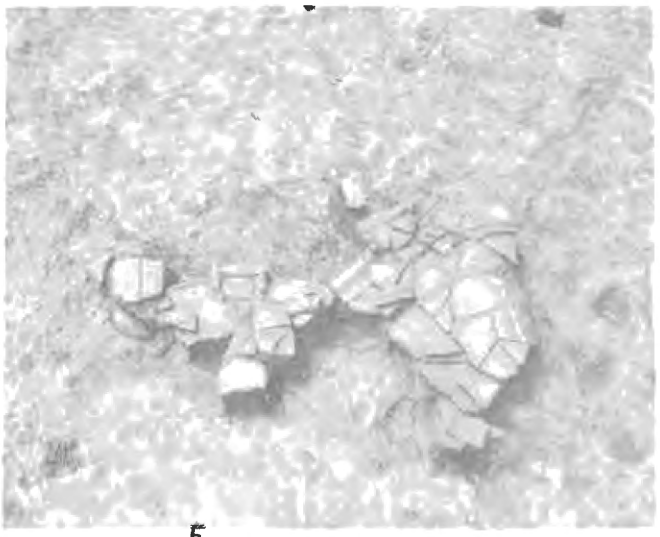
（1～4は、昭和45年度発掘、5～8は昭和46年度発掘）

第31図　J.D－3住居址内
炉址中出土の双口異形土器

第32図　双口異形土器の出土状況

第33図　K区－20G出土
の浅鉢形土器

第34図
浅鉢形土器の出土状況

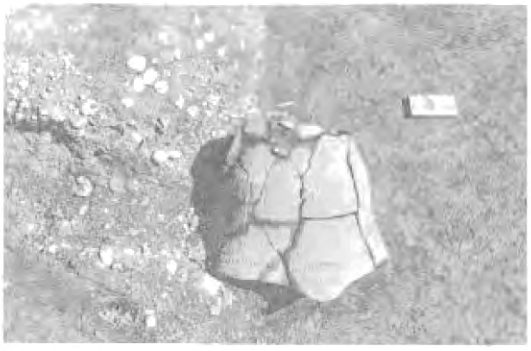


第35図　J·D－5住居址の床面直上における
深鉢形土器の出土状況

第36図　J．D－6住居址床面
直上より出土した深鉢形土器

第37図　P－6小竪穴から出土した
深鉢形土器

第38図　P－6小竪穴における土器の出土状況



第39図　J．D－8住居址内出土の土器（右）と、その出土状況（左）

6. 石　　錐	1	0	1
7. 磨製石斧	0	7	7
8. 打製石斧	10	11	21
9. 浮子（軽石）	2	14	16
10. スクレーパー	2	0	2
11. 石　　槍	0	2	2
12. 多孔石	1	2	3
13. 石　　棒	2	1	3
14. 石　　玉	1	0	1
15. 不　　明	4	18	22
計	(58)	(100)	(158)

これらを生活用石器（磨石、石皿、たたき石、凹石）と生産用石器（磨製石斧、打製石斧、石鏃石棒、スクレイパー、石錐、浮子、多孔石など）に分類してみると、両者の比率は前者が61／158（39％）、後者は71／158（45％）となる。石棒や装身具等のいわゆる石製品は、4点しか発見されていない。

今回は概報であり、詳細については後日報告することとし、これらのうちから典型的なものを選んで紹介したい。

なお、第40図2、3、4、6、12、14、15、16は昭和45年度調査分、第　図1、5、7、8、9、10、11、13は同46年度調査によって出土したものである。

石　鏃（第40図1～6）

4・6は黒曜石製、2・3はチャート製である。形態は三角形で脚を有するものが圧倒的に多い。

1は、J·D－№1住居址のピット内より出土、伴出土器はないが中期か？

2は、T－X区21Gより出土。時期は不明。

3は、LⅣ区17GのJ·D－№7住居址内覆土下層より出土。伴出土器は、馬浜式を主体とする前期土器群である。

4は、QX区－19Gより出土。時期は不明。

5は、J·D－№7住居址の覆土中より出土したが伴出土器なし。

6は、H·D－№1住居址（古墳時代・真間式期）の腐　土中に混入していた。

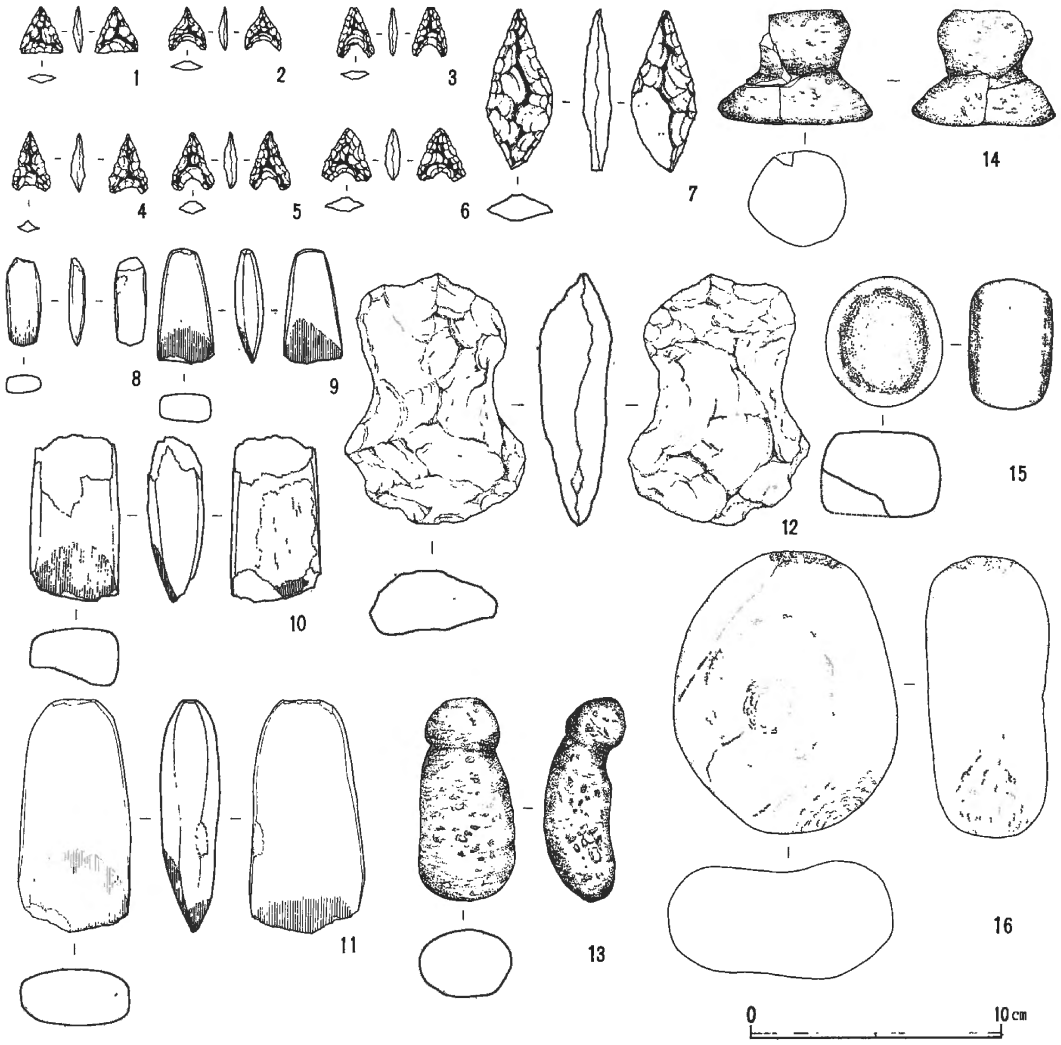
石槍（第41図7）は砂岩製。縦長6.4cm、幅2.5cm、中央部の体厚1cmを測る。この石槍は、L－V区7GのJ·D－№8住居址床面直上から出土しているが、その形態や製作技法からみて、先土器代終末期～縄文時代早期のものであることは明らかであり、中期縄文時代人が竪穴住居をつくるため関東ロームを掘り下げた際に土中より掘り上げ、それが混入したものではないか。

磨製石斧（第41図8～11）

8は、ノミ形の小型磨製石斧である。石質は、蛇紋岩製。M－Ⅳ区16GのJ·D－№5住居址床面直上から出土。頭部に打撃を加えた跡があり、1部欠損している。

9は、頭部に比して刃部の幅が広く、三味線の撥に近い形状をしている。頭部に打撃痕があり、刃部も一部欠損している。LⅣ区－17GのJ·D－№12住居址覆土上層より出土。同層中の出土土器は、加曽利EⅡ式87片、加曽利EⅢ式30片、阿玉台式15片である。

10、11は、いちおう石斧として通用する機能を備えている。いずれも輝緑岩製、刃部は鋭い。しかし、10は片面が非常に薄く、打割痕がいまだ残っており、この部分だけ成形が未完である。刃部先端が欠損しているため明確ではないが、おそらく片刃に近い形態と思われる。10は、N－V区8GのJ·D－№11住居址覆土上層、11は、L－Ⅳ区17GのJ·D－№12住居址床面直上より出土。いず



第40図　石器および石製品実測図

1～6　石鏃　7　石槍　8～11　磨製石斧　12　打製石斧

13～14　浮子　15　すり石　16　くぼみ石

れも時期は、加曽利EⅡ式期である。

12は、RX区－16Gより出土。いわゆる分銅形の打製石斧である。流紋岩製。製作にあたって偏平な河原石を使用したとみえ、一部に自然面が残っている。刃部の磨滅は第40図の下方部の両面に見られるが、とくに自然面の残っている側（図面左側）に著しい。

15は磨石、16はくぼみ石である。15は安山岩製、表土中より出土。16は第3紀砂岩製であるが詳細な時期不明。

13、14は、軽石製浮子である。両者とも紐を通す孔はなく、くびれめに紐を結ぶ形態を呈する。

13は、ＬＶ区－12ＧのJ・D－№13住居址の床面直上出土。時期は、加曽利ＥⅡ～Ⅲ式期。

14は、ＳＸ区－25Ｇ出土。同一層中の土器は、前期黒浜式18片、諸磯式16片である。

土製品（第41図１～13）

総数119点を数える。このうち紐かけのキザミ目を有する土器片錘が59点、紐かけの跡はないが打割や研磨によって形態を整えた土製円盤（土器片利用）が56点あり、この両者によって土製品の96％が占められる。この他に土製耳飾が４点出土している（第41図10～13）。このうち10、11は後期安行式期のものであるが、12、13は前期の抉状耳飾である。

土器片錘および土製円盤に使用された土器片の時期は、圧到的に中期・加曽利Ｅ式が多く、土器片錘で全体の76％、土製円盤では全体の75％を占めている。また土器片錘の紐かけの跡は２ケあるものが１番多く、全体の75％を越えている。重量別の分類では、30ｇ台のものが多く（32％）、次いで40ｇ→20ｇ→10ｇの順となる。10ｇ～40ｇ台の合計は全体の75％を占めており、このあたりが土器片錘の適性重量かと思われる。

土器片錘（第41図１～６）

イ）紐かけ個数別分類

- ○ 紐かけ１ケ所（４点）
- ○ 紐かけ２ケ所（44点）
- ○ 紐かけ３ケ所（５点）
- ○ 紐かけ４ケ所（３点）
- ※ 不　　明（３点）

ロ）重量別分類

- ○ 10ｇ未満（１点）
- ○ 10 ～ 19ｇ（８点）
- ○ 20 ～ 29ｇ（８点）
- ○ 30 ～ 39ｇ（19点）
- ○ 40 ～ 49ｇ（10点）
- ○ 50 ～ 59ｇ（４点）
- ○ 60 ～ 69ｇ（５点）
- ○ 70 ～ 79ｇ（１点）
- ○ 80 ～ 89ｇ（１点）
- ○ 90ｇ以上（２点）

ハ）時期別分類（土器片時期）

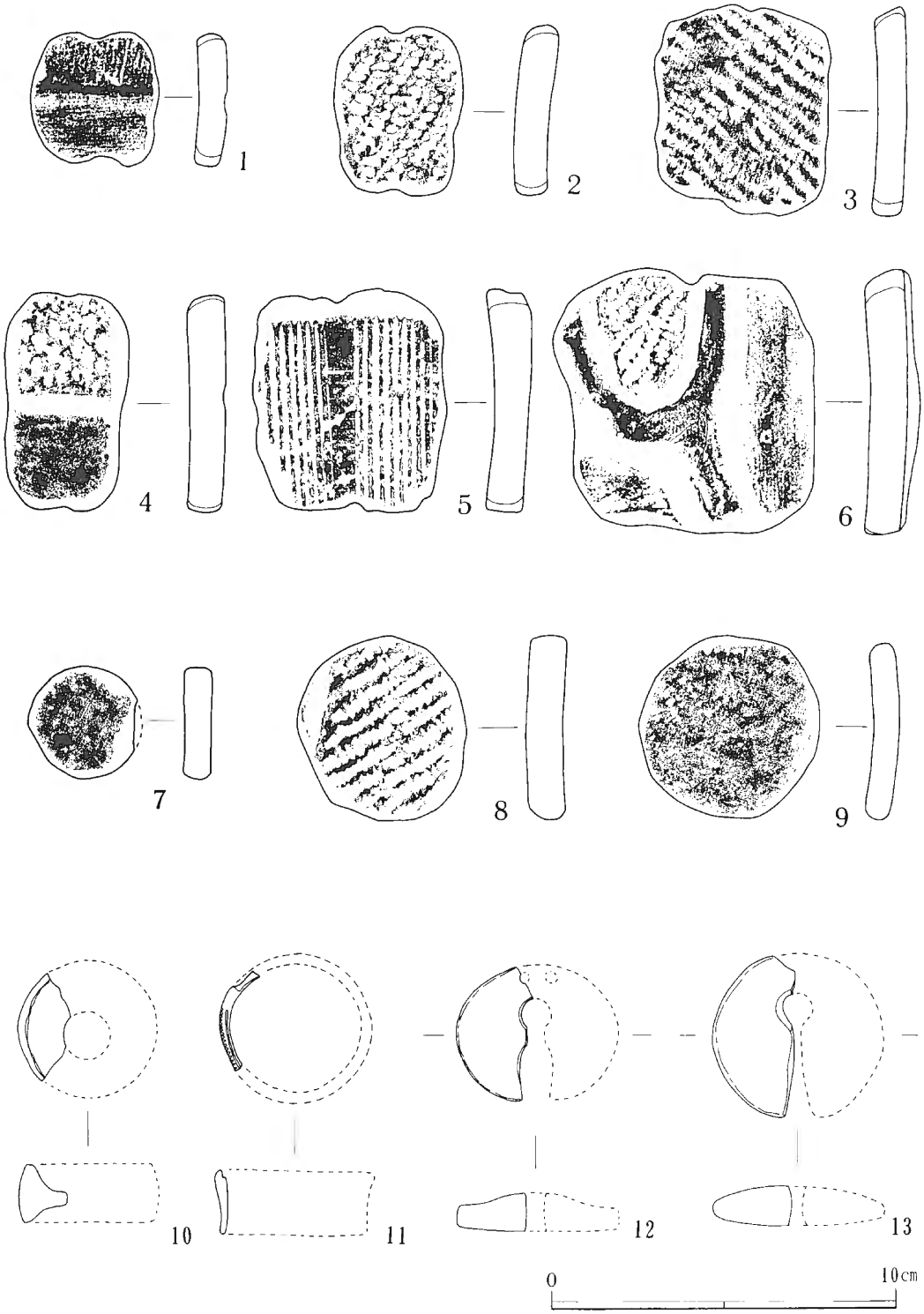
- ○ 阿玉台式土器片（11点）
- ○ 加曽利Ｅ式土器片（45点）
- ○ 堀之内式土器片（２点）
- ○ 加曽利Ｂ式土器片（１点）

土製円盤（第41図７～９）

図示したのはほんの一部である。いずれも縁辺をていねいに磨りあげて円型にしたものであるが、この他に打ち欠いただけのものもある。総数56点のうち、縁辺を磨りあげたもの20点、打ち欠いただけのものは36点を数える。これらの時期的分類と重量別分類を試みたが、その結果は紐かけのある土器片錘とまったく同じであった。このようにいわゆる「土器片錘」と「土製円盤」とは、その素材や製作方法（縁辺を磨りあげるか、打ち欠いただけか）が同じであるばかりでなく、使用された土器片の時期や出来あがりの重量まで、まったく一致しており、僅かに紐かけがあるか、ないかの相異だけしかないと言ってよい。しかも出土状態から、これらの機能を裏づけるような所見は得られず、現時点では、土製円盤が土器片錘の未完製品なのか、あるいは両者とも完成品であり、各々の用途が異なるものなのか、判定は難かしい。

土製耳飾り（第41図10～13）

４点出土している。このうち、２点は滑車形耳飾りで、11はPX－19G第４層出土。つくりは薄手でよく研磨されている。10は断面三角形で無文。ＴＸ－16ＧのH・D－№５住居址内覆土中より出土。12と13は土製の抉状耳飾りである。いずれも中央の抉状部分から半分に割れている。13はＳＸ－14Ｇの第１層中から出土。この層は表土・攪乱層であるが、黒浜式と浮島式土器が多量に含まれていた。12はＳＸ－15ＧのJ・D－№５住居址覆土中より出土。本層中より前期土器片がまとまって出土しているが、これらは関山式～浮島式まで多種に亘っているため、どの時期か明確でない。この耳飾り表面には、赤色の顔料の付着が認められ、さらに抉状部の右側奥部に補修口とみられる穿孔の跡がある。（庄　司　　克）



第41図　土製品実測図

1～6 土器片錘　　7～9 土製円盤　　10、11滑車形耳飾り　12、13土製抉状耳飾り

(2) 古墳時代の遺物

今回の第1次から第3次までの加曽利貝塚における遺跡限界確認調査で発見された古墳時代の遺物は、おもに、完掘された南側平坦部のH・D－№1住居址内と東側傾斜面のH・D－№5住居址内から出土したものである。これらを生活のセットとして捉えるため、各住居址ごとに概観してみることにした。

1. H・D－№1住居址内出土の遺物

(1) 土師式土器

甕形土器（第42図1・2・3）

1は口縁部の約3分の2と胴部以下を欠損し、口径は推定で約26cm、現存高16cmをはかる。口縁部に器形の最大径があり、めくれるように外反し、胴の肩部はやや膨らむが、底部にむかって直線的な長胴形をなす。胎土はわずかに石英など細礫粒を含むが緻密で、焼成はかたい。胴部外面は使用による炭化物の付着・浸透で黒褐色を呈する。口縁部は横なで、胴部外面は口縁部にむかう縦方向へのヘラ削り、内面は横と斜方向へのヘラ押しなどの整形痕が認められる。底部欠損のため断定はできないが、甑の可能性も考えられる。

2は口縁部の約4分の3と胴部以下を欠損し、口径は推定で約23cm、現存高12cmをはかる。口縁部は「く」の字形に外反し、胴部がやや膨らむ長胴形で、口縁部と胴部中位に最大径がある。胎土は細礫粒や砂粒を含むが緻密で、焼成はかたい。口縁部は横なで、胴部外面は口縁部にむかう縦方向のヘラ削りが、内面は横と斜方向のヘラ押しなどの整形痕が認められる。

3は口縁部の約5分の4と胴部以下を欠損し、口径は推定で約20cm、現存高10.6cmをはかる。口縁部は「く」の字形に外反し、最大径が胴部中位にある球形の胴と思われる。胎土は細礫粒や砂粒を含むが緻密で、焼成はかたい。口縁部は横なで、胴部外面は縦と横方向のヘラ削りの整形痕が認められ、使用による炭素の付着・浸透により部分的に黒褐色を呈する。内面は輪積の痕をヘラで横方向に押圧した整形痕が認められる。その他、甕形土器底部破片など出土している。

坏形土器（第42図4・5）

4は口唇部を約3分の2欠損するが、口径は推定で約14cm、器高4.2cmで、丸い底部から内湾して口縁部にいたり、口唇部が立ちあがる。胎土は細礫粒を含むが緻密で、焼成はかたい。内面は指で滑らかに押圧整形されているが、外面は成形時の巻き上げ痕の上に、指による押圧整形痕などが認められ、内・外面とも彩色され赤褐色を呈する。

5は器形の約3分の1を欠損するが、口径は推定で13.6cm、底径5.6cm、器高4.1cmをはかる。口縁部はゆるく外傾し、上げ底ぎみにヘラで削られた底部に「×」印の沈刻がある。胎土は細礫粒を含むが緻密で、焼成はかたい。外面は横方向にヘラ削りや押圧の整形痕が認められ、口縁部は横なでのあと面を削り稜を作っている。内面の口縁部は横なで、底面は放射状の押圧整形痕が認められる。

(2) 須恵器（第42図6・7）

6は坏蓋で、口縁部の約3分の2とつまみ部を欠損するが、口径は推定で16.6cm、現存高2.4cmをはかる。巾のせまい内傾する口縁部から周縁はゆるやかに湾曲し天井部で扁平となる。胎土はわずかに細礫粒を含むが緻密で、焼成はかたい。内・外面ともロクロによる整形痕が認められ、天井部に同心円状のヘラ削り整形痕がある。

7は坏で、口縁部の約5分の1を欠損するが、口径14.8cm、底径10.6cm、器高3.8cmをはかる。器形はややひずむが、広く外傾する坏に0.5cm巾の貼りつけ高台がつく。胎土や整形、焼成などは6と同様で、底部は回転ヘラ削りのあとに高台を貼り、なでつけている。6・7とも灰色を呈するが、7は内面に炭化物の付着が認められる。

(3) その他

土製支脚（第42図8）

現存長10cm、最大径9.4cmで一部欠損しているので現状は円錐形に似る。胎土は細礫粒や砂粒を多く含み、植物茎の付着痕もある。使用により火を受けたため器面はもろく砂状に剝落する。

土　玉（第42図9）

直径約1.4cmの球状を呈する。穿孔されている面が少し扁平となり、ほぼ中央に直径約0.2cmの貫孔がある。胎土は緻密で焼成はかたい。表面はなでつけの整形が認められる。

刀　子（第42図10）

鉄製で、身の長さ（身巾）は6.6cm、茎の長さ4.3cmをはかる。刀身の形状（造込）は「平造り」で、棟は角棟をなす。身巾は元で0.9cm、先で0.6cm、茎の巾は元で0.6cm、先で0.3cm、身の

厚さ（重ね）は約0.3cmをはかる。

以上のように、H・D—№1住居址の出土遺物を概観してみると、遺物の出土量が比較的少なく、かつ破片が多く、生活のセットとしては不十分であるが、住居址の床面に接着して出土している以上、住居址の所属する時期を判定するには貴重な資料と言えるであろう。

そこで、埦形を小型化したような彩色のある4の坏、5の坏、2や3の甕形土器には鬼高期の形態が認められるが、胴部に膨らみをもたない口縁部が強く外反する1の甕形土器や、6と7の蓋を伴なう底部に高台のつく須恵器の坏などは、真間期の形態に多く認められるものである。したがって、土器の全体的要素としては鬼高期末の様相を呈するようにみえるが、その一部に真間期の特徴をもった要素が認められるので、生活のセットとしては真間期とは言えないまでも、時期的にはすでに真間期に入っていたと判定すべきであろう。

したがって、ここではH・D—№1住居址をひとつの目安として、いちおう真間期に属するものとした。

2. H・D—№5住居址出土の遺物

(1) 土師式土器

甕形土器（第42図11・12・13）

11は口縁部と胴部の約3分の1を欠損し、頸径約12cm、底径7.6cm、現存高31.4cmをはかる。胴部中位で最大径27.2cmをはかり、肩より底部まで丸味のある長胴形を呈する。胎土は細礫粒や砂粒を多く含みやや粗いが、焼成はかたい。外面は、最大巾部より頸部にむけて右斜上方向へのヘラ削りや押圧の整形痕が、その下底部にかけては、おもに右斜下方向へのヘラ削りや押圧の整形痕が認められる。使用による炭素の付着・浸透で部分的に黒褐色を呈する。内・外面とも器面の剝落が著るしく、器形には成形時の輪積の痕が認められる。

12は口縁部と胴部の3分の1を欠損するが、11と同様に丸味のある長胴形を呈する。頸径は推定で約15.2cm、底径8cm、現存高30cm、胴部最大径27cmをはかる。胎土は細礫粒や砂粒を多く含みやや粗いが、焼成はかたい。外面は、胴上部は右斜下方向へのヘラ削り痕や押圧の整形痕が、その下底部にかけては不定方向への整形痕が認められる。11と同様内・外面とも器面の剝落が著るしい。

13は口縁部と胴部の約3分の1を欠損し、頸径は推定で約13.6cm、底径7.6cm、現存高24cm、最大径24.6cmをはかる。胴部の中位に最大径があり、ほぼ球形を呈する。この器形には、頸部より立ち上がりをもって外反する口縁部がつくと推定される。胎土に細礫粒や砂粒を多く含むため器面がざらつくが、焼成はかたい。外面は胴部中位より頸部にむけて左斜上方向へのヘラ削り整形痕が認められ、底部にかけては右斜下方向へのヘラ削りなどの整形痕が認められる。底部も粗いヘラ削りで整形されている。内面は剝落が著るしいが滑らかな押圧整形痕が残る。この他、甕形土器底部破片が出土している。

坏形土器（第42図14）

14は口径11.4cm、底径3.2cm、器高4.7cmをはかる。小さい底部より外傾ぎみに広がり口縁でゆるく内湾する。底部以外は内・外面とも彩色され赤褐色を呈する。胎土は細礫粒を含むが、焼成はかたい。内面は剝落があるが、滑らかな押圧整形が認められ、外面は横方向へのヘラ削りや押圧の整形痕が認められる。底部はヘラ削りで整形のあと、「×」印の沈刻をしている。

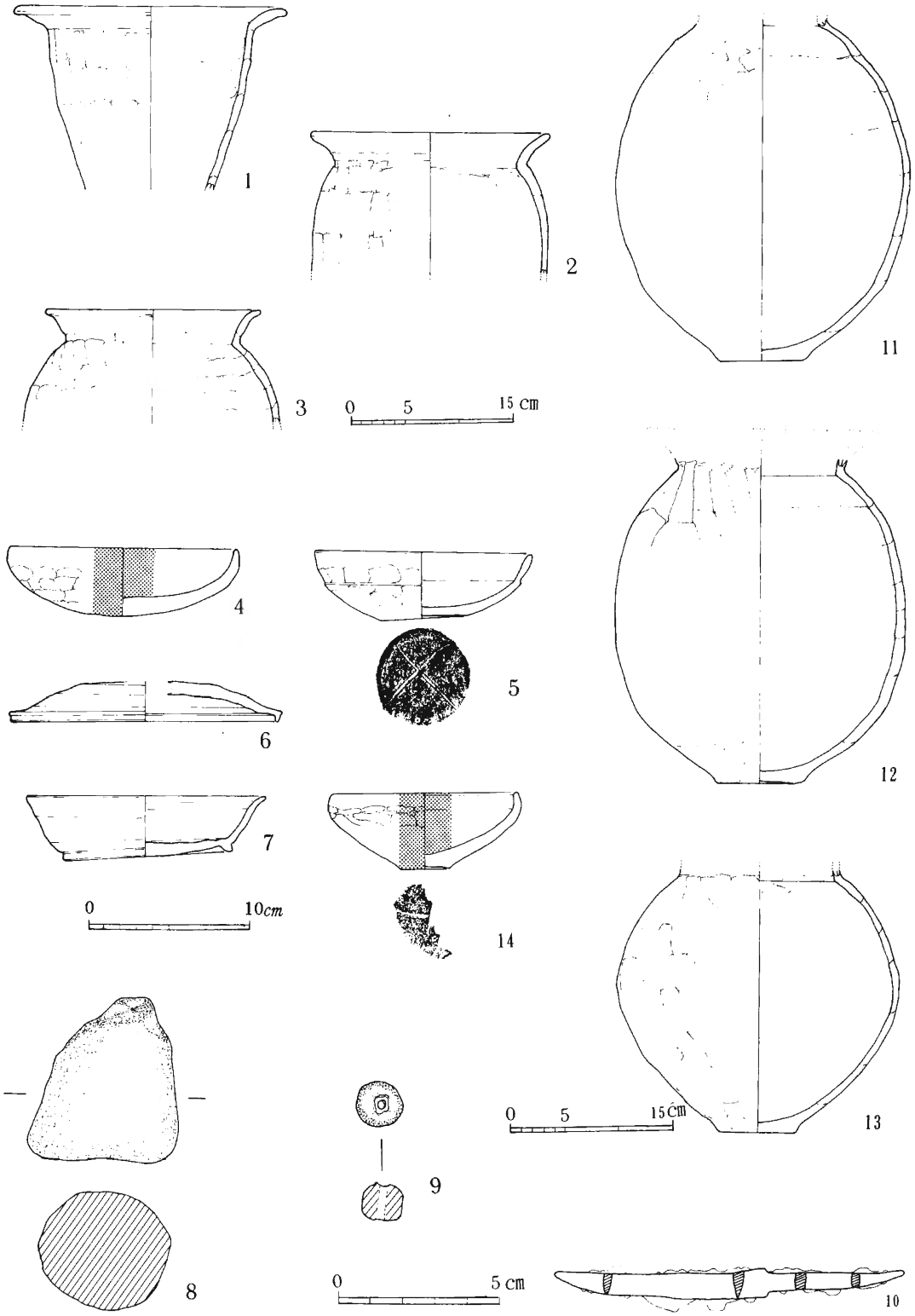
(2) その他

鏃　先（第45図）

多少刃先のこぼれがあるが、ほぼ完形と思われる。鉄製で、巾約21.3cm、長さ17.6cm、折り返えし約4.4cmをはかる。厚さが約0.5cmの方形の鉄板を両側から折りまげた、いわゆる「風呂鏃」の先である。腐触がはなはだしく、鱗片状に剝落するため正確な測定は不可能であった。

H・D—№5住居址の床面から出土した土器は、貯蔵穴の周辺にまとまっていたが、完形品は比較的少なかった。14の坏や、11と12の中膨らみのある長胴化してきた甕や13の球形胴の甕などには、鬼高期の中葉以降の特徴が認められる。しかし、生活のセットとしては不十分な出土量であるので、この住居址の存続した時期の上限を鬼高期中葉とし、それ以降の鬼高期に属するものとした。

（後藤　美智子）



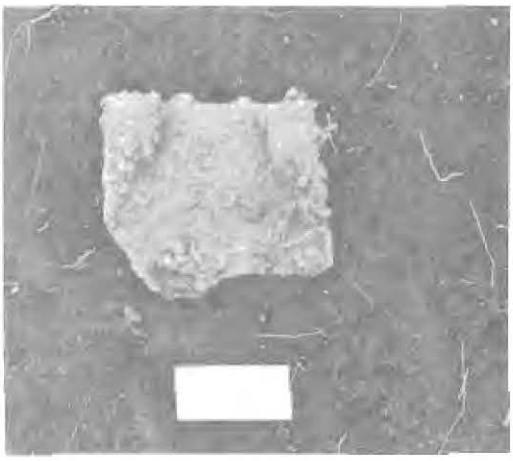
第42図　加曽利南貝塚南側平坦部および東側傾斜面より発見の古墳時代住居址内出土遺物

H・D－1住居址……1、2、3甕形土器　4、5 坏　6、7須恵器蓋・坏　8支脚　9土玉　10刀子

H・D－5住居址……11、12、13甕形土器

第43図　加曽利南貝塚南側平坦部より発見のH・D－1住居址内カマド付近における遺物の出土状態

第44図　H・D－1住居址内出土の須恵器坏



第45図　H・D－5住居址内出土の鉄製鏃先

第46図　加曽利南貝塚東側傾斜面より発見のH・D－5住居址内貯蔵穴付近における遺物の出土状態

おわりに

昭和45年から46年にかけて、3次にわたっておこなわれた加曽利貝塚の遺跡限界確認調査は、大略以上のとおりである。いうまでもなく、今回の調査の対象は、南貝塚の南側平坦部および東側傾斜面という、ごく限られた範囲であって、広大な加曽利貝塚遺跡全体の限界を確認しうるものでは到底ない。それは、全域の輪郭を捉えるために必要な対象の数十分の一にも満たないものである。それにもかかわらず、従来予測だにしなかったいくつかの新しい事実が発見され、これまでの認識を大きく変える必要が生じたのである。

このことについては、すでにいろんな形で発表し、指摘してきたところであるが、ここでは、今回の発掘の成果に基づいて、ごく簡単にまとめてみたい。

1. 古墳時代の集落の存在

南貝塚南側平坦部の西南端から鬼高期から真間期にいたる4基の住居址が確認され、また南貝塚東側傾斜面においては、その岬状に突出した台地先端部から鬼高期の住居址が2基発見されている。この両地点は、距離的には200 m以上も離れていて、無関係のように思われがちであるが、決してそうではない。むしろ、同じ台地上において、古山支谷に突出する岬状の台地先端部から西に向って分岐する小支谷に面して、その台地の縁辺部に展開する同一集落か、あるいは単一集落が時期的に移動した軌跡を示す可能性がある。

また、縄文時代の貝塚集落とこの古墳時代の集落とは無関係であるとする向きがあるが、時代をへだてて、同一立地に集落が構成されたということ自体に重要な意義がある。その集落が存続するための条件として、いかなる自然的背景や生産的背景があったかを考えるとき、その集落の性格や機能や特色を捉える上で、重要な傍証となる。

さらにこの集落の存続とその前後の断絶は、貝塚集落の定着性を捉える上で、重要な証左となる。たとえば、大型貝塚を残した縄文中期から後期の集落は、果して同一集落の存続か、断続か、それとも別の集落との交代かという重要な課題を解明する上で、この古墳集落の同一台地上における消長の様相こそ大きな鍵となるからである。

2. 縄文早期の炉穴の存在

岬状の台地先端部に、5基の茅山式期の炉穴が集合していた。それが水田面との比高が2～3 mの低地にあり、支谷の奥に位置していることから、従来の認識を改めたことは先にも述べた。これは開発に伴う緊急発掘の増大によって、今日では常識となるほど類例が増加している。しかし、この時期には、千葉市においては、小中台町の鳥込貝塚など沿岸地域では貝塚を伴うものも数多い。中期以降に大型貝塚が発達する同じ台地上に占居しながら、この時期には、まだ貝塚を伴っていないことが、むしろ留意すべき点なのである。また、他の遺跡においては、茅山期の炉穴は台地上に展開するのが一般であるのに、なぜ、台地上の平坦部では、それが見当らず、台地先端の低地にのみ密集しているかが問題となるであろう。

3. 縄文前期の集落の存在

上にのべたことは、そのまま前期の場合にも当てはまる。同じ岬状の台地先端部において、前期の黒浜式期から関山式期にかけての住居址が2基発見され、やはり貝層や貝塚を伴っていない。また台地上平坦部においても、前期の貝層堆積はまだいずこからも発見されていない。しかし、千葉市においては、前期の集落は比較的沿岸に近い台地上に立地し、そのほとんどが小規模な貝塚を伴う傾向がある。

このように、中期以降に大型貝塚が発達する同じ台地上に集落を構えながら、いずこかに、まだ知られぬ小規模な貝塚を埋蔵している可能性があるにしても、まだこの時期には顕著な貝塚は残していないのである。この消極的な現象こそ、実は中期以降の大量の貝類採集という積極的な現象の意義を解明する重要な鍵を握っているのである。

4. 貝塚外の中期集落の存在

南貝塚南側の平坦部において、10基にのぼる中期の住居址が発見された。しかも、約半数のものが、廃棄された後に投入された小規模な貝層を伴っていた。これこそは、従来の認識を改めるべき重大な発見なのである。すなわち、かつて大型貝塚の周辺には、その貝塚を残した人びとの住居址が展開しているものと考えられていた。ところが、貝層がおもに縄文中期に属する北貝塚の周辺にあるべき中期の住居址が、貝層がおもに後期に属する南貝塚の外側から多数発見されたのである。

このように、馬蹄形をなす大型貝塚の外側にも多数の住居址群が存在する以上、これもまた集落であることには違いないとすれば、はたして、大型貝塚内の集落と貝塚外の集落とは、どのような関係にあるのであろうか。同一台地上にありながら、約100～200 mをへだてているとはいえ、別々の集落であり、一方ではもっぱら貝類を好み、ひたすら貝を食す集落があり、他方では、なぜか貝類をあまり好まぬ集落があって、お互に背中合せに居住していたとは、到底考えられない。当然両者は同一集落の中に含まれていたとみるべきであろう。

5. 貝塚外の後期集落の存在

南貝塚の東側傾斜面から後期の住居址が2基発見されている。数は少ないが、貝塚の外側にもかなり広範囲に住居址が展開しており、後期の集落とても、決して貝塚の内側にのみ限定されることはないことが証明されたわけである。このことは、昭和39～40年における南貝塚の緊急発掘においても、昭和41～44年における野外施設の建設に伴う発掘調査においても、すでに重ね重ね確認されてきたことなのである。

6. 遺跡限界の把握

従来、加曽利貝塚などという遺跡の名称は知られ、その貝塚分布の範囲とか、遺物や遺構の分布範囲とかによって、その漠然とした位置は認識されていたが、その貝塚や集落の限界が、どこからどこまでであるという明確な把握がされたことがなかった。したがって、遺跡の名はあっても、その実体はなかなか捉えようがなかったのである。それも、従来の調査範囲が狭小であったからとか、調査体制が小規模だからというだけには止まらない。それよりも、本質的な観点において、遺跡の捉え方や視野の狭小さや問題意識の遍狭さに最大の原因があったのである。

7. 「馬蹄形集落論」の誤まり

かつて、加曽利貝塚のような馬蹄形や環状をなす大型貝塚も、日々の「ゴミ捨て場」として捉え、その「ゴミ捨て場」が馬蹄形や環状をなすのは、その内側にある集落自体が馬蹄形や環状をなしていたからだと考えられてきた。すなわち、集落の形態が貝塚の形態を規定したというが、その実、残存する貝塚の形状によって、集落の形態を想定してしまっていたのである。その証拠には、従来貝塚の貝層部や内側のみが調査の対象となってきたが、貝塚の外側が発掘調査されたことは一度もなかったのである。その点では、今回の限界確認調査は、学界におけるはじめての試みとなったわけである。

その結果、前述のとおり、大型貝塚の外側にもかなり広く集落が拡がっていることが確認され、当時の集落を大型貝塚の内側に押し込めてしまうことは不可能となった。すなわち、「馬蹄形集落論」は、その観点においても事実においても明らかに誤まりであることが証明されたわけである。

8. 大型貝塚の意義

この加曽利貝塚の遺跡内において、縄文早期から人びとが居留し、前期にも集落が構えられながら、それまでは貝塚を伴っていなかった。大型貝塚がにわかに発達する中期になっても、南貝塚や北貝塚の周辺には、廃棄された住居址に投入された小規模な点在貝塚を伴う集落が共存している。この大型貝塚の内側の集落と点在貝塚を伴う外側の集落が同一の集落であるとすれば、大型貝塚と小型貝塚とは、はたしていかなる関係になるのであろうか。かつて時期が重なれば、小型貝塚もやがて大型貝塚に発達すると論ぜられていたが、同一集落内に両者が共存するかぎり、この論議は成り立たない。

従来いわれてきたように、馬蹄形貝塚の中に集落があるのではなく、むしろ、集落の一角にこそ馬蹄形貝塚があるのだと考えるならば、それが集落全体の形態とは無関係に、特定な形態を呈することも矛盾しない。すなわち、集落の一角における貝殻の集中投棄の場所とすれば、それは個々の住民の日常的な「ゴミ捨て場」であるよりは、集落の中の共同的な意味をもつものと考えた方が必然性がある。

いずれにしても、集落の立地やその限界、生活舞台の全体を把握せずして、集落の形態や構造を論じてみても無意味なことである。まず、集落の全貌を知るためには、その遺跡の限界を確認すると同時に、その地形的条件や自然環境との関連において、もっと広範に全体的に捉えなければならない。その意味において、このささやかな発掘調査が今後の本格的な遺跡の限界確認のための一つの契機となれば、それに越した成果はないであろう。

（後　藤　和　民）